九州産業大学美術館

平成29（2017）年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
ふくおか博物館人材育成事業実行委員会報告書
編集：緒方 泉（事務局長・九州産業大学美術館教授）
デザイン：小野 勝也（有限会社 フォース）
発行日：2018年3月30日
印刷：東洋紙業高速印刷株式会社

平成29年度 文化庁
「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
実施報告書

ふくおか博物館人材育成事業実行委員会
（九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、
田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館）

1 現状課題の把握

2015年11月、ユネスコ総会で採択された「博物館とコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」は1960年の博物館に関する勧告以来55年ぶりのものであった。新しいユネスコ勧告では、「ミュージアムが教育に果たす役割」が独立した条項（第12項）となった。ICOM2019京都大会を前に、改めて何のために博物館は教育活動を行うのか、博物館教育は地域社会の中でどのような意味を持ち、どういう可能性があるのかを問い直す必要がある。それは2020年東京五輪・パラリンピック大会に向け、文化庁が2012年のロンドン大会の18万件を上回る20万件の文化プログラム実施を目標にしたこととも関係する。20万件という数字を達成していくには、開催地東京だけでは難しく、5,700近い全国各所の地域博物館もその実施拠点とならなくてはならない。そのためには、ユネスコ勧告の地域博物館への浸透、ユネスコ勧告を実践する英国・米国の博物館学芸員との積極的な交流、さらに持続可能な文化プログラムの研究開発やそれを支える学芸員を含めた博物館創造活動人材の育成を通じて、九州・沖縄地域博物館の機能強化を図っていく必要がある。

2 事業の目的

本事業の目的は、現状課題を解決するために、九州産業大学美術館が、アジアに開かれた「ミュージアム都市福岡」におけるグローバル化拠点となり、①ユネスコ勧告に基づく博物館の社会的な役割を検証する国際交流事業の実施、②2020年東京五輪・パラリンピック大会に向けた文化プログラムの実施拠点を九州・沖縄地域で形成するため、持続可能な文化プログラム（展覧会、教育プログラム）の研究開発、及びそれを支える学芸員を始めとした博物館創造活動人材育成を目指した研修会事業の実施、③子どもの「学力向上」「心の安定」を目指し、異なる館種の地域博物館と学校が協働する文化プログラム（ミュージアムスクール事業）を実施することである。

事業目的達成のため、大学博物館、地域博物館等で構成する「ふくおか博物館人材育成事業実行委員会」を組織し、事業計画、実施運営、評価検討改善（PDCAサイクル）を統括する。

3 事業の構成

本事業は「ふくおか博物館人材育成事業実行委員会」の統括の下、次の3つの事業を実施する。

博物館創造活動人材育成のための学芸員研修会事業

持続可能な文化プログラム（展覧会・教育プログラム）開催に向け、博物館資料について「守る技術（保存・修復）」「調べる技術（調査研究）」「見せる技術（展示）」「伝える技術（教育普及）」「活かす技術（運営）」が修得できる、実践的な研修機会を現職学芸員等対象に九州・沖縄全県で開催する。

ユネスコ勧告に基づく博物館創造活動モデル構築に向けた国際交流事業

博物館の社会的な役割をテーマに、ユネスコからミュージアム担当者を招いた国際シンポジウム及び英国・米国の博物館学芸員との交流を通じてアジアに開かれた「ミュージアム都市福岡」における、グローバル化拠点としての新たな方策モデルを構築する。

新たな博物館教育モデルを研究開発するミュージアムスクール事業

中核館と構成団体（歴史系、美術系、科学系博物館）が学校と協働しながら、持続可能な文化プログラムとなるミュージアムスクール事業の研究開発、また、その実施・運営を行うことにより、新たな博物館教育モデルを構築する。

4 目標・効果等

期待される地域博物館への効果

本事業は、地域博物館学芸員に対して、専門的で、継続的な学習環境を有する九州産業大学美術館が中核となり、地域毎・分野別の学芸員研修会等の研修機会を提供することや文化プログラムの研究開発・実施を通じて、博物館創造活動人材の資質向上が図られるとともに、ユネスコ勧告の地域博物館への浸透、英国・米国博物館学芸員との交流を通じて、グローバルな視点に立った新たな博物館モデルの構築に寄与できる。

期待される地域社会への効果

本事業において、九州産業大学美術館が中核となり、「ミュージアム都市」と言われる福岡の大学博物館及び地域博物館が学校と協働して持続可能な文化プログラム（展覧会・教育プログラム）を実施することで、博物館、学芸員、そして「若き博物館創造人材」となる児童生徒とのコミュニケーションが深化し、地域社会におけるより強固な博物館づくりの推進が期待できる。

これらの効果を測るため、研修会に参加した学芸員が事後開催する博物館の展覧会・教育プログラム等についての追跡調査、文化プログラムに関わる学芸員（潜在学芸員も含む）や参加者への事前事後アンケートによる行動変容分析から、本事業の効果を定量的、定性的に検証する。

5 組織体制

実行委員会名簿

委員長　北島己佐吉（九州産業大学美術館・館長）
副委員長　三島美佐子（九州大学総合研究博物館・准教授）
委員　鬼本佳代子（福岡市美術館・主任学芸主事）
委員　朝烏和美（田川市石炭・歴史博物館・学芸員）
委員　市川靖子（直方谷尾美術館・学芸員）
監事　松村利規（福岡市博物館・主任学芸主事）
監事　三宅基裕（海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部魚類課次長）

事務局名簿

事務局長　緒方　泉（九州産業大学美術館・教授）
事務局次長　永井浩一（九州産業大学産学連携支援室・課長）
事務局員　林田　純一（九州産業大学産学連携支援室・室員）
事務局員　中込　潤（九州産業大学美術館・学芸室長）
事務局員　西嶋昭二郎（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員　小栗栖まり子（九州産業大学美術館・学芸員）
事務局員　松村裕子（九州産業大学産学連携支援室・室員）
事務局員　四ヶ所　悦子（九州産業大学産学連携支援室・室員）

6 学芸員技術研修会スケジュール

番号	研修内容・開催日	開催場所	講師
①	著作権 2017年7月24日（月）	佐賀大学	福井 健策 （弁護士、日本大学芸術学部）
②	展示グラフィック 2017年8月21日（月）	北谷町役場	熊谷 淳一 （株式会社ノイエ）
③	資料保存 2017年9月20日（水）	長崎歴史文化博物館	木川 りか （九州国立博物館）
④	博物館教育 2017年12月4日（月）	大分市美術館	齋 正弘 （美術家、元宮城県美術館）
⑤	展示制作 2018年1月16日（火）	鹿児島市立美術館	洪 恒夫 （東京大学総合研究博物館）
⑥	ユニバーサル・ミュージアム 2018年1月30日（火）	熊本市現代美術館	広瀬 浩二郎 （国立民族学博物館）
⑦	梱包技術 2018年2月12日（月）	九州産業大学	ヤマトロジスティクス（株）社員
⑧	照明技術 2018年2月27日（火） 2018年2月28日（水）	高鍋町美術館	藤原 工 （株式会社灯工舎）

平成29（2017）年度学芸員技術研修会日程一覧表

Contents

1 現状課題の把握 …… 01
2 事業の目的 …… 01
3 事業の構成 …… 01
4 目標・効果等 …… 02
5 組織体制 …… 02
6 学芸員技術研修会スケジュール …… 02
7 学芸員技術研修会
① 著作権 …… 03
② 展示グラフィック …… 05
③ 資料保存 …… 07
④ 博物館教育 …… 09
⑤ 展示制作 …… 11
⑥ ユニバーサル・ミュージアム …… 13
⑦ 梱包技術 …… 15
⑧ 照明技術 …… 17
8 ユネスコ講演会 …… 19
9 英国調査 …… 22
10 米国調査 …… 24
11 キッズ・ミュージアム・スクール …… 27
12 キッズ・ミュージアム・スクールまとめ ① …… 31
キッズ・ミュージアム・スクールまとめ ② …… 32
キッズ・ミュージアム・スクールまとめ ③ …… 33

学芸員技術研修会

①「著作権」

テーマ

「どんな情報が著作権で守られるのか？」「どんな利用に著作権は及ぶのか？」「何処まで似れば侵害なのか？」「PD（パブリック・ドメイン）とは？」など。日ごろ文化芸術・教育に関係する皆さんが悩まれている著作権に関する考え方、対応法を学びます。

講　師

福井 健策（弁護士、ニューヨーク州弁護士、日本大学芸術学部客員教授）

開催日時

2017年7月24日（月）13:00～17:00（12:30～受付開始）

開催場所

佐賀大学（佐賀県佐賀市本庄町1）

内　容

13:00 講義1「著作権を考えることは未来を創造すること」 **15:00** 休憩　**15:15** 講義2「皆さんからの質問に答える（事前アンケートを基に）」 **16:25** 演習「ここは聞いておきたい！福井先生に何でも相談してみよう」 **17:00** 終了

受講者数

69名（福岡17名、佐賀38名、熊本4名、長崎1名、大分4名、宮崎5名）

事後アンケート

質問1

今回の研修会で福井先生の講義から学んだことは何ですか？

○著作物がどのように分類され、権利が付与されるかということを整理することができました。対象物が、まず「著作権」対象に該当するのか⇒該当するとなると、「複製」や「上演」「配信」など、どの利用方法を自分たちが希望するのかによって、誰に許可を得る必要があるのか、という利用許諾までの一連の流れの大枠を掴むことができました。

○不勉強だったため、ずっと著作権=こわいという意識がぼんやりとあったのですが、先生の講義で、著作権とは決して新たに出て来る表現を阻害するものではなく、挑戦してさらに発展するのを歓迎しているものなのだと、目から鱗が落ちる思いでした。

夏目漱石と正岡子規の「猫目線での創作のアイデアを、正岡子規が使ったとして、二人の友情的にはアウトだが著作権的に問題はない」という例えはとてもわかり易かったです。なぜ問題がないのかという理由も、標語や実用品のデザイン等の例を出されてすごく納得できました。世の中著作権に関する問題で揉めているものは、大抵は作り手に対する「敬意」を大事にしていれば、お金の問題以外は大抵解決できるのでは…と今回の講義を通じて思いました。

○著作権侵害に対するリスクから、作品のオリジナリティの守り方まで、現場で役に立つ知識を多数教えて頂きました。印象的だったのは、著作権は創造的に表現したものの権利を守るという前提はあるが、絶対的な領域があるわけではなく、著作権に関する条項も時代によって更新されたり、判例などによって状況が変わったりするということでした。常に新しい情報に対してアンテナをはり、知識を更新していく必要があることを学びました。

○著作権に対してさらに関心を強く持とうと痛感しました。一見著作権侵害にならないようなものが侵害になったこと(スイカ写真事件)、現在では、裁判にかけると無罪になりそうなものがSNSで拡散されたために、事態が悪いほうへ転がることがあるということなどは参考になりました。当館も運営するHPやSNSがあるので、これまで著作権や肖像権に注意をしなければという漠然とした意識を持っていましたが、今回の研修会を通じて具体的に何に気をつける必要があるのかということを学べたように思います。

質問2

今回の研修会を受けて、今後、自館はもちろん、他館そして団体、個人の活動で気をつけたい著作権のポイントは何ですか？

○当館は歴史資料や様々なジャンルに関わるカルタの展示の他、夏には戦争と平和関連の展示をすることがやはり多いのですが、戦時加算というものが存在していた事を知らなかったので、教えていただいて助かりました。当館の学芸員も知らないという者がいたので、当時の資料などの展示のときは気をつけようと思いました。

○委託制作物の著作権など、契約提携時点、曖昧に残されがちな条件等について著作権が派生するか、意識的対応を心がけたい。自館収蔵資料は江戸期を中心とした古文書や美術工芸品であり、著作権は消滅しているが、収蔵者としての供覧条件について、本研修の学習成果を考慮し、職場全体での再考の機会としたい。

○イベントの広報などを行う際にHPやSNSなどは便利なツールであるが、インターネット上のメディアは、著作権の例外規定が少ないという現状を知りました。デジタルコンテンツは容易に複製ができてしまうため、今後はより慎重に著作権に配慮しながら、魅力的な情報発信を行っていきたいと思いました。

質問3

今回の研修会について参加してよかったなあと思う点があればお書きください。

○当館は観光施設としても多くの人々に認知されており、県としても来年の明治維新150年事業に向けて県内外からの取材等が増えてきている中で、自衛という意味でも、著作権についてもっと知る必要があるということを痛感いたしました。

○著作権については、他の研修を受けたりしていて分かっている部分もありましたが、身近な事例で分かりやすく説明を受けことで、少しずつ知識を増やすことができました。一番心に響いた事が、福井先生の「忘れがたい著作権の事件」です。「すばらしい作品を辞退させるという形で終息させないため、作品を殺さないために知恵を使って社会に伝えられるよう、このために著作権の知識を使ってほしい。」この言葉がとても印象的でした。今回の研修はとても勉強になりました。職場でも複命書から、充実感が伝わると上司から言われました。どうもありがとうございました。

○著作権が何を禁止し、誰がその権利を持つのか、逆に著作権の及ばないものとは何か、例外規定なども含めて、細かく分解して説明してくださったので大変わかりやすかったです。実際には現場でその都度判断する必要があると思いますが、判断のヒントになる事項を教えていただき、大変ありがたかったです。

○著作権に気をつけて下さいばかりではなく、守って下さいという言葉が印象的で、これは紹介できないのではなく、紹介できるような環境を作ることも大事なことだと気づかされました。とても勉強になることばかりで、とても研修に参加できたことを感謝しております。このような機会がありましたら、ぜひ参加したいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○これまで著作権を心配するあまり前に進めなかったプロジェクトも、今回お話を聞く中で、考え方や進め方を整理することができました。著作権法が一般に公開されていることは知っていても、法律用語が難しかったり、実践のなかで色々と疑問が湧いたり、かといって弁護士の先生に相談に行くのはハードルがあったりと二の足を踏んでいたため、今回、具体的な判例やリスクの度合いまで、参考になるお話を直接伺うことができ大変勉強になりました。

学芸員技術研修会

②「展示グラフィック」

テーマ

最近はポスター、チラシ等広報物を予算の関係から学芸員が制作することが多くなっています。今回は視覚伝達効果が高い広報物を制作するための「キャッチコピー」「文字の配置・大きさ・フォント」「配色」「紙面構成」等について学びます。

講　師

熊谷 淳一（株式会社 ノイエ代表取締役）

開催日時

2017年8月21日（月）10:00～17:00（9:30～受付開始）

開催場所

北谷町役場（沖縄県中頭郡北谷町桑江226）

内　容

10:00 各班（5人×9班）で自己紹介　**10:15** グループワーク1「他館のチラシデザインの相互評価」 **10:45** 講義1「チラシ作りの基礎1<チラシ制作の4つの重要要素>」 **12:10** 昼食　**13:00** グループワーク2「チラシの改善点を話し合う」 **13:20** グループ発表「チラシの改善点について説明する」 **14:00** 講義2「チラシデザインとキャッチコピーの基本技術」 **15:00** 休憩 **15:10** 演習1「課題多きチラシを熊谷先生が改善提案する」 **15:20** 講義3「展示パネル制作の基本技術」 **16:20** 演習2「熊谷先生に何でも相談しよう」 **16:40** ふりかえり「今日は意味のある時間になりましたか」 **17:00** 終了

受講者数

50名（福岡2名、沖縄48名）

事後アンケート

質問1

今回の研修会で熊谷先生の講義から学んだことは何ですか?

○チラシの作り方、1/3の法則、載せる情報は多いほどよいということ。コピーやデザインは、自分が言いたいことを書くのではなく、お客様が知りたいことを書く。パネルの字間、字切れにも注意すると、読みやすさが全然違うこと。

○チラシは集客のためのものなので、マーケティングに基づき、チラシを手にした人の興味関心を惹くためにイメージ訴求ではなく、機能訴求である必要があるという点を知ることが出来て良かったです。一般の方は文字が多いと読まないといわれることもあり、特に最近はデザイン重視、雰囲気重視のチラシを作成することが多かったのですが、出来るだけ多くの情報を掲載し、その上でそれをすっきり見せ、活かすためにデザインやレイアウトを工夫するということを学べました。

また、キャプションの行間、文字間についてもサンプルを見ながら、話を聞くことができ、綺麗に整えられたものの見易さも再認識しました。

○一番印象に残っている内容は、「情報量が少ないと、行こうか判断できない」ということです。今までチラシを制作する際は、できるだけ文字数(情報)を少なくした方がスッキリするし、見やすいと思っていました。内容がはっきりしないまま（少ない）情報を載せる事も多いので、チラシに載せるその企画の「価値」（魅力）をもっと企画者からも引き出し、その「価値」（魅力）を伝えるチラシづくりをしていきたいと思いました。

質問2

今回の「展示グラフィック」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の印刷物、解説パネル、キャプション等の展示グラフィックで注目したいポイントは何ですか？

○キャプションと、照明の強さや色との相性は普段見る分には違いを意識しにくいですが、研修会のスライドで色々な組み合わせを比べてみて、読みやすさに大きく違いがでることがわかりました。お客様に読んでもらえるパネルを作るために、今後意識したいことのひとつだと感じました。

また、いろいろな館のチラシを見ることができるアプリも、自館の展示会の際に参考にしたいと思ったので、早速スマホにダウンロードしました。

○実際に自分自身が対象者となった時に「実際に行きたくなるやわらかいチラシ」とはどういったものなのか、を日常的に意識する必要性を強く感じました。もともとキレイなチラシはよく持ち帰りますが、内容を読んで来館したチラシの魅力について、今後分析するのをクセにしていきたいと思います。展示についても、キャプションのメインとなる情報と広がりを持ったサブ的情報の差別化や見やすさの工夫がどのようにされているのか、さまざまな企画展などで注目していきたいです。

○チラシのデザインは「今まで重要なことは裏側に書いて、日付を目立たせる。そしてあまり表面に情報を載せ過ぎてごちゃごちゃしないように」など、研修で言われていたことの間逆をやっていたな、と感じています。また、館の強みを打ち出していきたいとも感じました。

質問3

評価シートやマトリックスは今後どのように活用したいですか？

○自分がチラシなどの広報物の制作を担当することが多いですが、その際に、留意するべきポイントとして、自身でのセルフチェックにまず利用したいと思っています。また、企画会議などの際には他の職員から意見をもらえるように利用するとともに、デザインを外注する際には、業者とのやり取りの際にも活用できるものだと思っています。

○今までは、デザインや日時、内容をどう伝えるかということばかり気にしていました。メリット・コピー・個性・デザインをバランスよく取り入れ、評価するのだと初めて知りました。こちらが言いたいことを伝えるだけではなく、利用者の生活や人生の質が上がるかもしれないメリットやコピーに視点をあてなければならないと気づかされました。これからは注意点を忘れないよう印刷物を作成する時は評価シートを活用していきたいと思います。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○近年、デザイン、レイアウトのアイデアがあまり浮かばず、チラシのデザインに苦労していたところでした。今回、研修会に参加し、目を惹くデザイン、レイアウトはもちろん必要ですが、それ以上に企画の魅力をどのように伝えるかが重要だということを知ることが出来て良かったです。

また、他の施設でも同じような悩みを持っていたことを共有できる機会になりましたし、懇親会で沖縄のメンバーだけではなく、熊谷先生や緒方さんともさまざまな話をすることができ、良い刺激を受けることができました。

○広告物のデザインはセンスやアートの心得がある人の方がうまい！という固定概念を取り払うよい機会となりました。チラシについて評価しあう機会は、はっきり言いたいことが言えて気持ちがよかったです。これまで職場内では作り手に遠慮したり、「好みの違いだしなぁ」とスルーすることもあったため、「好み」ではなく「経営判断」であるということを強みに、言いたいことをきちんと言いあえるような環境をつくっていきたいです。先生が伝えてくださったノウハウをきちんと踏まえ、今後も「行ってみよう！」と思わせるチラシづくりを目指します。

また、毎回展示パネル作成で悩んでいたことが他館の方々と共有できたことが何よりよかったです。今後も実り多い研修会を期待します。ありがとうございました。

○他館の多くのチラシを見ることができ、とても参考になりました。個人的にデザインのネタ帳になりそうな見本が欲しかったので、チラシ類を紹介しているアプリなどを紹介していただけて嬉しかったです。

7-2

学芸員技術研修会

③「資料保存」

テーマ

「災害時、水濡れによる紙資料に発生しやすい微生物やそれら微生物による人的被害をいかに防ぐか」など、文化財を守ることと、それに関わる人の健康を守ることについて如何にバランスをとって取り組んでいくのかを学びます。

講　師

木川 りか（九州国立博物館学芸部博物館科学課長）

開催日時

2017年9月20日（水）13:00～17:00（12:30～受付開始）

開催場所

長崎歴史文化博物館（長崎県長崎市立山1-1-1）

内　容

13:00 自己紹介、「資料保存」の悩みの共有　**13:30** 講義「博物館資料と生物被害対策」　**15:00** 休憩　**15:15** 演習1「見てみよう！展示室内の資料保存対策」　**16:10** 演習2「木川先生に何でも相談してみよう」　**16:40** ふりかえり「今日は意味のある時間になりましたか」
17:00 終了

受講者数

22名（福岡6名、長崎11名、宮崎4名、沖縄1名）

事後アンケート

質問1
今回の研修会で木川先生の講義から学んだことは何ですか?

○①低酸素燻蒸の問題点や低温度燻蒸の推奨等。燻蒸処置も日々変化していると認識しました。このような講座にはできる限り参加をして、常に新しい情報を知る必要があると思いました。山笠の燻蒸で一部でも、もれがあると、そこから虫が発生する事などの失敗談などは、誰でも同じ失敗をしそうな事例だと同感しました。
②そのほか、実際の体験談や日々の作業内容などをとても楽しそうに話され、目に見えるようでした。まだ、各種のデータなどは必要な時に確認ができるので、助かります。
○東北の事例で、津波に浸かった資料をいち早く修復ければならない、しかしどうしても人間の環境が優先になる、という状況の中で保存に動くのは、いざ自分がその場で被害にあっている状況でできるか自信がありません。しかし保存に動き、伝え、見て知ってもらわなければ文化財はなくなります。熊本城のように、人の心を支える文化財もあるということを改めて感じました。カビを例にあげても、調査しなければ人体に猛毒であってもすぐに気付けません。IPM、そして後世に伝えるために保存に動く姿勢は、作品を守るだけでなく、それを保存したり鑑賞したりする“人”も守る ということにハッとさせられました。
○普段から疑問に思っていた保管方法等に質問でき大変勉強になった。特に展示台の長期保管する際に巻段ボールを使用していたがゴキブリ等の温床になりえるなど普段の作業で改めるべき点など館に還元できる部分が得られた。また、LED等の新技術におけるまだ研究の進んでない導入に関する問題などを知る良い機会になりました。
○真水の水害、汚水の水害、海水の水害。ひとくちに「文化財が濡れた！」といっても、色々な場合があるのだと分かりました。濡れたまま燻蒸する危険性についても、知ることができてよかったです。知らずに非常時を迎えていたら、おそらく対処すべき大量の資料に焦って、乾ききらないうちからどんどん燻蒸を進める…なんてことが大いにあり得たと思います。

質問2
今回の研修会は、長崎歴史文化博物館のご協力で展示室の保存環境の説明、修復室の活動説明を取り入れました。久保研究員、富川研究員のお話を聞いて、気づいたことをお書きください。

○水害で傷んだままとなっている古書を手づくりのアルカリ水につけて修復する。美術館が所蔵する資料と少し異なるが、古文書の取り扱いのある図書館関係者にも聞いていただきたい内容だった。
○当館は、修復を行うものは業者委託、そしてもちろん修復室も存在しないので、バックヤードに入らせていただけて興味深かったです。実際にダメージを受けた資料と修復方法を拝見しましたが、本一冊を修復するのにも、何百何千枚もの紙を洗浄したり乾かしたりと、気が遠くなるような作業です。独自のアナログな知識で…とおっしゃっていましたが、道具や材料をオリジナルで工夫できるのは 富川研究員の相当な知識、根気、熱意がなせることだと思います。

質問3
今回の「資料保存」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の資料保存で注目したいポイントは何ですか？

○美術館・博物館の展示環境は、基本的に完全無欠なんだと思っていたふしがありますが、虫・気密性・におい・汚れ・光…どこの館にも「粗」があって、「工夫」があるのだろうとうっすら分かってきました。その粗と工夫に注目したいです。
○収蔵庫が存在しない館ですが、一時的に保管している絵画や紙資料があり、館外から作品を運び入れる際は埃・糞を取り除く、燻蒸、防塵マット、温湿度管理など行っています。漆器など美術品の展示は過去に一度あるくらいですが（美術館のような設備がないので基本的に美術品は展示できません）、急激な温湿度の変化は作品に悪影響を及ぼすことを改めて認識しました。保存に使用する道具についても具体的にご教示いただき参考になりました。樟脳とパラジクロロベンゼンは混同しないよう留意します。ひとまず雨漏りの危険がある部屋のアートソーブを移動させます。また、薦めていただいた凍結乾燥も試してみたいです。
　長崎歴史文化博物館のような本格的なIPMを行うことはできませんが、出来る限りの展示環境づくりに励もうと思います。
○当館は燻蒸設備を備えていないため、冷凍による資料の殺虫処理が参考になりました。具体的な日数や手順も教えていただいたので、早速次の資料の受け入れ時に実施したいと思います。

質問4
今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○それぞれの館種で状況が異なるものの、基本的に[予防の観点から資料保存にあたること]を抑えなければならないことを改めて認識することができた。現場学芸員だけが資料保存の認識を持つだけでなく、事務方を含め現場全体で認識を共有することが一番大切であることを実感した。また文化財が芳しくない状況下にあるときは、作業者の健康を保護するための取組も必要ということがわかった。とくに恐ろしいのが呼吸器に入るカビや土埃ということ、防塵マスクでないとこれらを防げず健康被害に遭うことがよくわかった。
○他館の学芸員の方からお話を伺える機会は貴重なので、九州での学芸員研修は本当にありがたいです。自館で直接役立つわけではありませんが、学ぶ機会を大事にしていきたいです。また次年度も開催していただけますと幸いです。

学芸員技術研修会

④「博物館教育」

テーマ

「美術とは『ビックリ』することである」と話す齋正弘さん。宮城県美術館での長年の実践事例から博物館教育の意義を学びます。合わせて、大分市美術館の探検を通じて博物館教育の実際を体験します。

講　師

齋 正弘（美術家、元宮城県美術館教育普及部長）

開催日時

2017年12月4日（月）10:30～17:00（10:10～受付開始）

開催場所

大分市美術館（大分県大分市上野865）

内　容

10:30 自己紹介　**10:45** 講義「ミュージアムにおける博物館教育の意義」　**11:30** 演習1「齋さんと大分市美術館を探検しよう」　**12:30** 昼食　**13:30** 演習2「10才の子どもを対象とした教育プログラムを考えてみよう」　**14:30** 演習3「教育プログラムを発表してみよう」　**15:30** 休憩　**15:45** 演習4「もう一度、齋さんと美術館探検をしてみよう」　**16:30** ふりかえり「今日は意味のある時間になりましたか」　**17:00** 終了

受講者数

18名（福岡9名、熊本1名、佐賀2名、大分1名、宮崎2名、鹿児島1名、広島1名、大阪1名）

事後アンケート

質問1

今回の研修会で齋先生の講義・演習で学んだこと、びっくりしたことは何ですか?

○多くの方がお考えのことかと存じますが、やはり、美術館探検の対象が美術作品や博物館資料ではなく、博物館施設（授乳室、送風口、展示室のカーペット・コンセント、幅木など）を用いた子ども向けのワークショップは大変驚きました。自身の考えがまだまだ子どもたちに向いていないことを身に沁みて感じる経験となりました。

○ずばり「10歳以下の子どもたち」を対象とした鑑賞において、美術作品よりもカーペットや空調口など鑑賞の対象として扱った点です。10歳以下の視点の高さなど、頭を柔軟にしなければならないことを強く感じました。

○エデュケーションとスクーリングの違い、「学校教育でできる事は学校に任せ、美術館はやらなくてよい」といったキーワード。そしてその方法を具体的に見せて頂いた点。

○まずは、「自分が受けた教育しかできない」という言葉が非常に響きました。自分が知らないことはできないと考えると、自ら色々と吸収しなければいけないと改めて考えさせられ、午後に齋先生と美術館探検できたことは大きな経験になりました。作品を見ずに建物を見ていくというところは、本当にびっくりしました。やっちゃいけないことをしているワクワク感は久しぶりでとても新鮮に感じました。

○「10歳以下を対象とした対応」の演習では、美術館なのに床のコンセントや空調に興味を持たせる齋先生の視点には驚きました。確かに同じ絵を大人と子どもが鑑賞する場合、子どもがその価値を評価することは難しく、それよりも美術館（博物館）に遊びに行こう、好きな場所になってもらう、あそこに行くと面白いなどと思わせることが博物館や美術館の重要な役割なのだと思いました。無限の可能性があり、それを学芸員がどのように引き出すか、また正解は一つではなく、それを色々と試行錯誤して導くのが学芸員の仕事の醍醐味なのだと思いました。大人であっても同様で、何か面白いものがあると思ってもらえるようなアイデアをだして、これからの館運営に努めたいと思います。大変良い機会でした。

○齋先生の講義を受けたあとでも、「スクーリング」から抜け出すアートワークを考案するにはもっと頭と心を柔らかくする必要があると、午後からの各グループのプレゼンテーションを見て痛感しました。「自分が受けたようにしか教育できない」を肝に銘じなければならないと感じました。

○子どもたちの視点になって、（利用者の視点になって）プログラムを作ること。特に、美術館内の見学を、作品の鑑賞を全く入れずに作るということに驚きました。自分たちが行っている美術館探検やギャラリートークは、誰のためにしているのか、という根本的な目的のところを突きつけられた感じです。今回のテーマ設定「10歳以下の子どもたちに」は、私たち学芸員の意識を180度転換しないと意味がないということを感じました。びっくり！

質問2

今回の「博物館教育」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の教育活動で注目したいポイントは何ですか?

○美術館や博物館への来館者には、それぞれの興味・関心があります。また、高尚なイメージをもって遠ざかっている人も多いです。齋先生のものの見方や探検の仕方は、美術館・博物館を身近な存在に感じさせるマジックだと思いました。年1回行っている「子供探検会」では、ぜひあの手法を取り入れて、子供たちの反応を見てみたいです。

○主たるは埋蔵文化財関係ではありますが、その分野に固執することなく、幅広い視野や可能性を模索しながら、来館者の人間形成の場となるような運営できればいいなと思いました。本研修では、扱う対象が生きもの、美術、歴史など、多様な職種の方々とお会いでき、「そういう見方・考え方もあるな～」と思える機会となりました。「○○だったらどうするかな?□□だったらどうなるかな?」などと考えて見るようにしたいと思います。

○各館で行っている教育活動が何を重要視している（何を目的としている）のか。教育活動には対象や手法も含めて多様なバリエーションがあっても良いと思うのですが、それぞれが何を目的としているのか（隠れたテーマなど）を知ったうえで、その活動がどう活かされているのかに注目していきたいと思いました。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○視野が広くなったことが一番です。数時間の研修会でしたが、どんどん新しい情報が入ってきて、とても濃密な時間を過ごすことができました。本当に研修会に参加できてよかったです。

○関西の集まりだと、美術系の方に出会うことが少ないので、美術の人のお話を聞けることや雑談ができることはとても貴重な機会です。博物館とは少し違って感性に直接訴える部分が大きいので、手法をそのまま博物館ですべて使うことはできませんが、導入やきっかけづくり、未就学児への働きかけなど参考になる部分はとても多いと感じています。

○全ての点において参加して良かったなあと思います。齋先生の講義・実演を受けられたことは大変勉強になりましたし、自然史博物館以外の方の意見や館の現状を伺えたことも刺激になりました。

○異種の美術館・博物館でグループ討議ができたことは、とてもおもしろかったです。いつもは、狭い事務室で数人の係が、任された仕事を、それぞれで推進する世界です。助言はあっても、個に任せる部分が多いです。グループ討議で、1つのテーマについてみんなでまとめあげるという行為は、とても新鮮に思えました。他の業種では、当たり前のことなんですが…。学芸員の専門的なプライドもあると思いますが、異種だからこそ自由になれるのかもしれません。もちろん、夜の懇親会は、最も大切な情報交換でした。このために行ったような気持ちもありますが、やはり本当の仲間づくりは、ここにあったように思えます。

学芸員技術研修会

Ⓢ「展示制作」

テーマ

「作品リストはできたけれど、これらをどう展示しようか？」「博物館展示論の授業をどう組み立てようか？」と日々思案する皆さん。今回は鹿児島市立美術館の展覧会を事例に、「展覧会の作り方」を講義、グループワークを通じて学びます。

講　師

洪 恒夫（東京大学総合研究博物館特任教授）

開催日時

2018年1月16日（火）10:00～17:00（9:30～受付開始）

開催場所

鹿児島市立美術館（鹿児島県鹿児島市城山町4-36）

内　容

10:00 自己紹介、「展示制作」の悩みの共有　**10:30** 報告「小企画展の作り方－鹿児島市立美術館を事例として－」（谷口雄三学芸係長）　**11:10** 小企画展「さつま→かごしま～幕末、明治の郷土美術」会場見学（谷口雄三学芸係長）　**12:00** 昼食　**13:00** グループワーク1「展示制作のココはいいなあ【I like】、ココはこうしたいなあ【I wish】というポイントを検証する」　**13:40** グループ発表　**14:20** 講義「展覧会の作り方で留意したいこと」（洪恒夫先生）　**15:10** 休憩　**15:25** グループワーク2「もう一度展覧会を見てみよう」　**16:05** 演習「洪先生に何でも相談してみよう」　**16:35** ふりかえり　**17:00** 終了

受講者数

33名（福岡6名、佐賀1名、熊本4名、大分2名、宮崎5名、鹿児島13名、山口1名、大阪1名）

事後アンケート

質問1
今回の研修会で洪先生の講義から学んだことは何ですか？

○展示はメディアであり、対話を通じて展覧会は完成するので、設計を十分に検討し余すところなくもてなすべし、と言う展示の定義そのものも、もっともで分かりやすかったです。また展示における配慮を、味付けに例えて説明されたくだりは、先生のこだわりの深さが感じられ、配慮にも段階があり、その段階ごとに、もてなしの手法が異なることが実感でき、たいへん勉強になりました。

○今までは現場で仕事をしながら先輩から学んできたため、方法や手順はわかっても、なかなか理論的な部分まではわかっておらず、漠然としていました。しかし、洪先生の講義を受けて、展示制作の流れや方法、考え方を詳しく学ぶことができ、頭の中がすっきり整理されました。特に印象に残ったのが、「展示制作は料理と同じ」という言葉でした。今後展示制作をする際には、「だし」「塩」「スパイス」のポイントを押さえて考えたいと思います。

○展覧会の企画を「客観化する」ことが重要だと学びました。展覧会の目的を明文化する、コンセプトを図式や図案化する、提供される側の立場になってみるといった言葉が印象的でした。ゾーニングや導線づくり（導線のタイプ）、効果的な展示方法も基礎知識として得ることが出来、迷った時にはここに立ち戻れるような指針を頂けたと思います。「Cook the Exhibition」として料理に例えた説明は面白い＆明快で、非常に理解しやすかったです。学芸員資格取得課程でも聞いたことの無いことばかりでしたので、大変に有益でした。展示行為一つ一つにこだわりと意味を持たせる、というのもスローガン級です。

質問2
今後展覧会を企画するに当たり、鹿児島市立美術館小企画展「さつま→かごしま～幕末、明治の郷土美術」を事例にしたワークショップから活かしてみたいことは何ですか？

○谷口さんの報告には共感できることも多く、中には身につまされるようなご苦労なども聞けて、まずは「自分だけではない」という安心感のようなものを得ました。ワークショップでは、たとえ小さい展示室であってもゾーニングは必要だということがよくわかりました。自館の130㎡あまりの展示室で展覧会を開催する時にも、活かしていきたいと思います。また、自分のワクワク・ポイントを観者に伝えるという展示行為が重要だと思い知らされました（情報の羅列に終わらせない）。ワークショップで出された数々の【I wish】は、自身が行う展示の際にも一つ一つ振り返りたいです。

○各自や各班でこの展示の“like”と“wish”を挙げていきましたが、特に“like”の西暦・年号・年齢すべての標記、年譜の色分け、“wish”の照明や展示順でのドラマチックな演出、は当館でも実践していきたいと思いました。また、“like”と“wish”探しを繰り返すことはより良い展覧会づくりに繋がるので、今後も鑑賞の際に続けていきたいと思います。

質問3
今後、他館の展覧会を見学する時に、どんなところに注目したいと思いますか？

○洪先生提唱の「Cook the Exhibition」に則して観ていこうと思いました。出汁（ゾーニングと導線）、塩分（文字情報）、スパイス（見せ方・演出）のバランスがよいかどうか。またこれまで私は、企画者のコンセプトや作品の魅力を鑑賞者の力で読み取らなくては、という姿勢で展覧会を見てきました。しかし、提供される側の立場になって展覧会が作られているかどうか、観者がアプローチしやすく情報を受け取りやすい展示になっているのかどうか、という目線で観ていこうと考えを改めました。

○展覧会のテーマに対し、何を資料として取りあげているか、そしてどのように展示しているか、さらに来館者の理解のためにどのような試み（パネル、キャプション等）を行っているかをこれまで以上に注目したいと思っています。

○何を訴えたいのか、企画者は何を特に見てほしいのか、です。光や空間の使い方、比較作品の有無などの具体的な展示方法からその構成の中心テーマを読み取りたいと思います。

○企画者のこだわりが，展示において，どのように具体化されているのか，注目しながら見学したいと思います。

○展示内容の理解と合わせて、同じ学芸員という立場から展示の意図を読み取ることまで注意をはらいたい。また、一度ではなく、複数回にわたって展示を見に行くということもやってみようかなと思った。全体を一度把握したうえで、改めて見たときに展示の意図がよく見えてくると思う。

質問4
今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○ケーススタディが出来た点です。洪先生の講義だけではなく、具体的に一つの展覧会を検証してみるというのが実際的で深い学びとなりました。まずは自分たちで展覧会を分析し、その後、講義内容に照らし合わせて見直せるプログラムは素晴らしかったです。また受講者が様々なミュージアムからの参加だったため、各館特有の悩みを聞けたり、出身館のジャンルによって学芸員の着眼点や意見に幅が出たりする点も刺激的でした。

○自分とは違う視点を持つ方の意見をお聞きすることができて良かったです。同じ展示を見ても、感想や関心が違い、自分では気づかなかったポイントに目を向けることができました。

　また、当館にとってはお隣さんであり、当館とは種類の異なる展示物を扱っている、鹿児島市立美術館の学芸員の方が、どのように展示構成を行っているか聞くことができたのも大変参考になりました。

学芸員技術研修会

⑥「ユニバーサル・ミュージアム」

テーマ

「さわって楽しむ博物館とは？」「なぜさわることが大切なのか？」「見常者と触常者とは？」「バリアフリーとユニバーサルの違いは？」「ハンズオン展示の意味は？」など、ユニバーサル・ミュージアムの疑問を講義とさわる体験を通じて学びます。

講　師

広瀬 浩二郎（国立民族学博物館准教授）

開催日時

2018年1月30日（火）10:00～17:00（9:30～受付開始）

開催場所

熊本市現代美術館（熊本県熊本市中央区上通町2-3）

内　容

10:00 自己紹介　**10:30** 講義1「無視覚流鑑賞法の極意」　**12:00** 昼食　**13:00** グループワーク1「無視覚流鑑賞法の体験（1作品目）」　**13:30** グループワーク2「無視覚流鑑賞の記録記入・共有」　**14:00** グループワーク3「無視覚流鑑賞法の体験（2作品目）」　**14:30** グループワーク4「無視覚流鑑賞の記録記入・共有」　**15:00** 休憩　**15:15** 演習1「グループで話したことを全体に発表　**15:45** グループワーク5「見ながらさわろう」　**16:10** ふりかえり　**16:20** 演習2「広瀬先生に何でも相談してみよう」　**16:40** 講義2「無視覚流鑑賞の６原則」　**17:00** 終了

受講者数

32名（福岡12名、熊本9名、佐賀1名、長崎2名、大分3名、宮崎3名、鹿児島2名）

事後アンケート

質問1

午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか？

○これまで目が見えないことに対してネガティブなイメージが強く、無意識のうちに視覚に障害がある方「でも」楽しめるように、という観点から博物館教育を考えていたように思います。広瀬先生の講義・コメントより、見えないからこそ得られるドキドキやワクワクがあることや触角で得た情報のほうがより記憶に残ることなど、視覚を使わないことのポジティブな面がわかり、晴眼者でも、視覚を使わないことで大きな収穫が得られることを学びました。

また、「コーナーを作って触っておしまいではいけない」「博物館の展示のいくつかは視覚以外の感覚を使って楽しむ展示があってもいい」点については、今後展示や教育等を作り上げていく際に念頭におかなければいけない事だと痛感しました。

○グループ発表後のコメント「目で見たものが正解という思い込み、答えが分からなくても良い。そもそも答えなどないのでは。」という言葉です。

自分に「さわる→想像する→実物を見る→正解を知る」のサイクルが固定観念として染み付いていることを強く感じました。

また、「アイマスク体験は短時間ではマイナスイメージになるだけ。長くしなければ視覚から開放されるイメージはつかめない」という言葉も印象に残りました。

質問2

午後の「見ないでさわる」そして「その体験を書き出し交換する」、その後「見ながらさわり、意見交換する」という流れから学んだことは何ですか？

○最も強く感じたのは大勢で作品を見ているはずなのに、目隠しで作品をさわると、その「物」との1対1の感覚が強くなり、作品がより身近になるということです。また目で見ると、タイトルにより固定観念が生まれてしまうので、見ずにさわる方がそれぞれの感じ方がバラエティに富んでいる気がしました。

○「見ないでさわる」では、私が視覚を使わないハンズオンが初めての体験だったというのもあるかと思うのですが、1つの作品を触ってみて、どんなものだろうかと考えるだけで、かなり神経を使った感じがしました。その分、目で見るよりもじっくり一つの作品に集中できている感覚でした。人形やぬいぐるみで考えるとわかりやすい感覚なのですが、視覚だけではなく触ることで、愛おしさや親しみをより持って作品鑑賞ができるのだと思いました。

次に「その体験を書き出し交換する」では、自分の感じたことを字や絵にすることで、自分の心の中を整理することができたように思います。

さらに意見交換をして、自分では感じなかった部分や、感じていたけれど上手く言葉に書き出せなかった部分などを共有することができました。さらに「見ながら触り、意見交換する」では、この作品だったんだ、とスッキリすることができましたが、答えを見てしまうことでそれ以上に想像が広がりにくくなってしまう感覚がありました。広瀬先生がお話されていた「目に見えない世界にアプローチする」というのは、物語などを読んでその世界を想像するのに似ている感覚で、視覚で見てしまうよりも無限性があるものなのだと感じました。それに、自分にしかない世界を想像する楽しさとワクワクがあります。この体験を通して、先生がお話されていたとおり、答えを見ない展示のほうが私は好きだなあと思いました。

3つの体験を通して、視覚に頼らないハンズオン展示は、目で見る展示よりも年齢や体の状態を問わず楽しめる鑑賞方法なのだということを改めて感じました。これは美術館に限らず博物館でも、または学校でも取り入れていけることだと思いますので、私たちの館でもいつか実現できたらうれしく思います。

○『見ないでさわる』、それを後で記録するという体験からは、『記録と記憶』について考えました。自分の場合、視覚を使った鑑賞では、記録に頼る傾向があるようで、心に刻む、記憶するということを疎かにしていたように感じました。

視覚を使わないと、鑑賞に対する集中力が増したように感じました。点から線、面、全体への広がりとともに、他者との情報交換によって、気付きか広がり、鑑賞の質が高まったと感じました。『見ないでさわる』のあとの『見ながらさわる』という体験は、それまでの鑑賞から新たな広がりがあったように思いました。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうだなあと思う点があればお書きください。

○これまで、たださわるだけ、鳴らすだけあった活動に「手のひらでさわる」「指先でさわる」「横や後ろもさわってみる」などのさわり方が広がりました。ワークショップで活用させていただきたいと思います。

○当館でも、ハンズオンに心がけてはいますが、どうしても触って終わりになってしまい、次の学びになかなか繋がりません。中には、乱暴に扱ってしまって、壊れてしまった資料もあります。作品を正しく楽しむことができれば、資料はただのモノではなく、来館者にとっても大切で身近な存在に感じられると思います。作品・来館者・作者・学芸員が同じ目線に立てるような導線を考えたいと思いました。歴史博物館なので、触れる資料が多いわけではありませんが、企画展ごとに少しでもハンズオンを準備してみたいと思いました。現在、民具のハンズオンを準備していますが、来館者に自由に触ってもらうスタイルなので、月に何度か、スタッフと一緒に楽しむ日を決めてみてはどうかと思いました。

7-6

学芸員技術研修会

⑦「梱包技術」

テーマ

「仏像の梱包はどこに注意すればいいの?」「紐の結び方って何回やっても覚えられない」「掛軸を巻くと、いつもタケノコみたいになる」など、作品の取り扱い方、梱包・開梱の仕方を実際の体験学習から学びます。

講　師

ヤマトロジスティクス社員4名（美術品輸送梱包技能士含む）

開催日時

2018年2月12日（月）10:00〜17:00（9:30〜受付開始）

開催場所

九州産業大学美術館（福岡県福岡市東区松香台2-3-1）

内　容

9:30 受付　**10:00** 自己紹介　**10:30** 全体説明（実習の目的・日程等の説明等）　**10:40** 研修開始（Aグループ「軸と茶器」コース：2階展示室、Bグループ「梱包材、仏頭梱包」1階展示室）　**12:30** 昼食　**13:30** 研修再開（コースを交代）　**15:00** 休憩（Bグループは1階へ）　**15:15**「これはどう梱包するの？」サプライズ梱包（美術館側で予め準備し、講師が即座にどう梱包するかを見学する。＊箱の作り方　＊綿枕の作り方などを含む）　**16:15** 15101教室へ移動　**16:40** 通関書類の説明、質疑応答　**17:00** 終了

受講者数

35名（福岡17名、佐賀3名、熊本4名、長崎3名、宮崎2名、鹿児島5名、広島1名）

事後アンケート

質問1

今回の研修会から学んだことは何ですか？

○紐を結ぶ位置や声かけなど、一つ一つの動作に意味があることが分かりました。細かい所作について理由を合わせて説明いただいたので、より安定して扱えるようになったと思います。

○これまで扱ったことがない仏像の梱包は、貴重な体験だった。また、掛軸の取り扱いを、改めておさらいできたことも有難かった。頭では扱い方を分かったつもりでも、実際に手に取ると思うように扱えない、と自覚できたことは大きかった。

○掛軸の扱い方や、茶器の箱の紐の結び方など、基本的ながらついつい自己流になりがちで、さらにいまさら聞けない・・・というようなことをもう一度おさらいできました。また、梱包に関しては仏像中心でしたが、梱包材の作り方、梱包する際の注意点（危険そうな箇所の把握、作業は複数人でコミュニケーションをとりながら等）といったすべての作品に共通する認識を持てたことは有意義でした。

サプライズ梱包では、ヤマトロジスティクスの素晴らしい職人技そして連携プレーを拝見しながら、その場にあるものでいかに応用するか、自分だったらどうするか、主体的に考えることを学びました。

○基本的な梱包技術はもちろんのこと、これから市民から急な寄贈・寄託の申し出の可能性がありますので「サプライズ梱包」を拝見することができ、大変勉強になりました。また、梱包は作品の安全だけではなく見た目の美しさも重要であるというお話が印象的でした。所有者の意向を伺って、それに添った作品の取り扱いをし、信頼していただけるような梱包を目指していきたいと思います。

○①梱包の基本的な技術（考え方、梱包方法、梱包材の作り方など）②輸送の中心に考えた場合の資料の取り扱い方③他館での状況（資料の特質と梱包の際に困っていることなど）

○見る・聞くだけでなく、それを実習できたことで、技術の習得がより深まった。また、梱包に対する姿勢や考え方を知ることができた。

質問2

今後の梱包作業で活かしてみたいことは何ですか？

○教わったことはほぼ全て実践的だったので、日常業務に活かせる。特に焼き物の梱包は、共箱のない資料を輸送、保管するにあたり大変参考になった。また、借用先で、先方に不安を与えない梱包（仕上がりの美しさを含む）は心がけていきたいと思う。

○今回は仏像などこれまで自分が扱ったことがなかった種類の梱包もさせていただきました。多様な経験の積み重ねが、今後の幅広い調査研究の可能性として活かせればと思います。

○専用の梱包材ではなく、定型の梱包材を使用することが多いが、基本に則り資材をうまく利用し作品に適する形に梱包していきたい。

○借用先で箱のない軸装作品や寸法の合っていない箱に入った額装作品に戸惑うことがありましたが、今回の研修で学んだことを活かして安全に作品を梱包できるように実践していきたいと思います。

○額装されていない絵画の梱包技術を今後も活かしていきたい。

○自分たちで資料（近世武家の御道具など立体物）を運搬する機会も多いので、その際に今回学んだ梱包や輸送に関する技術を活かしたい。

○資料を実際に借用することがあるので、自前で梱包する必要がある時に、今回学んだ道具などを参考にしながら、資料保存や、より安全な輸送梱包を行いたい。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○現場で学び直す機会はなかったので大変有難かったです。いきなり想定外のものを梱包してもらう課題も実践的で参考になりました。

○梱包資材の種類、現場での実践例などお聞きできたこと。ヤマトロジスティクスの講師と直接話せる機会が多かったので、些細な疑問でも気軽に質問できたことがよかった。

○他館の方ともお話できて、良い情報交換の場となった。

○ヤマトロジスティクスの皆さんの職人技が拝見でき感動しました。また個別の質問にも親切に答えていただき勉強になりました。

○作業者によって作品の取り扱い、梱包方法が異なることがあり、作品の安全を確保するために、作業方法を統一したいと思います。

○今回の研修会によって、安全な作品の取り扱いと梱包方法を学べましたので、大変勉強になり、参加して良かったと思います。学んだ内容を活かして、根拠を説明しながら作業工程を改善し、館での浸透を試みたいと考えています。

○美術品輸送のプロフェッショナルから、実際の経験を基にした話を伺うことができたことが何より勉強になった。また、他館の学芸員の方と問題を共有できたこともよかった。

○日頃、扱わない資料も扱うことが出来たことが大変有難かった。資料を知ることの重要性を感じました。また、他館の方と協力して作業することにより、コミュニケーションを採ることができ有意義であった。

7-7

学芸員技術研修会

⑧「照明技術」

■ テーマ

「毎回、展示照明は悩むよなあ」「どんなLEDを選んだらいいの」という皆さん。今回は照明の基本知識を学んだ後、ハロゲン電球、LEDなどを用いた作品を魅せるための展示空間づくりについて、グループワークを通じて学びます。

■ 講　師

藤原 工（株式会社灯工舎代表取締役）

■ 開催日時

2018年2月27日（火）10:00〜17:00（9:30〜受付開始）、
28日（水）10:00〜17:00

■ 開催場所

高鍋町美術館（宮崎県児湯郡高鍋町南高鍋6916-1）

■ 内　容

【1日目】

10:00 自己紹介　**10:30** 講義1「①光とは？②光と視覚③作品を正しく見せる光」　**12:00** 昼食　**13:00** 事例報告「高鍋町美術館の概要、展示照明の課題」　**13:15** 展示室へ移動、展示作品紹介　**13:25** 照明器具の説明　**13:45** グループワーク1（5班に分かれ、各班3点の作品について、様々な照明器具を試して、照明器具の特性を知る）　**15:00** 各班進捗状況説明、工夫した照明ポイントの紹介、藤原先生から講評　**16:05** グループワーク2（講評をもとに再作業）　**16:30** 講義2「LEDを中心とした新光源について」　**17:00** 終了

【2日目】

10:00 講義3「人を魅了させる光」　**11:00** 展示室へ移動　**11:10** 第1〜5世代LED照明の比較実演　**11:50** 昼食　**12:40** グループワーク3「3点をまとめる照明空間をつくる」　**14:00** 進捗状況の確認、作業継続　**15:00** 藤原先生の講評　**15:30** 発表「各班の成果と課題」　**16:00** 講義4「照明空間のつくり方」　**17:00** 終了

■ 受講者数

23名（福岡5名、佐賀2名、長崎1名、大分県3名、宮崎7名、鹿児島4名、沖縄1名）

■ 事後アンケート

質問1
２日間の実習で学んだ照明技術
（考え方、ちょっとした工夫）は何ですか？

○光や人の視覚、照明の基礎から、実際のライティング方法まで幅広く学ぶことができ、非常に勉強になりました。色温度や分光分布図は、これまで耳にしたり目にしたりすることはあったのですが、この研修を受けて初めてその特徴や使い方を理解することができました。「演色性」も初めて学んだので、今後の照明選びに役立てたいと思います。実習では、いろいろな種類の照明器具を実際に使うことができ、器具の使い方で光が変わったり、当て方で作品の見え方が変わったりする様子を目の当たりにできたことは、とても良い経験になりました。また、混光やカットライトでピンポイントに照らしたり、複数の照明を使うといった工夫は、今後参考にしたいと思います。

藤原先生のお話の中で「作品を正しく見せる光」と「オンリーワンの光」という言葉がとても印象に残りました。従来そこまで意識したことがなかったので、今後は意識して照明を考えたいと思います。

○同じ作品でも点光源では固く重量感があり、面光源では軽量感が出るなど照明によって質感が変わってくるので、照明を当てる位置や色温度も含め作品をどのように見せたいのかによって照明の種類を考えなければならないことなど、照明技術の重要性を強く感じた。

○照明器具を実際に扱い、展示空間を作る体験がよかったです。色温度によるちょっとした工夫だけでも作品の表現がガラッと変わることを学べたことが一番印象に残りました。また、光の演色性（こういった言葉も使う機会がなく勉強になりました）が照明器具によって違い、その色の表現のされ方が大きく違うことも学びました。豊富な照明機材と、それを判断できる藤原先生の感覚や分光器などの機材が近くにあって成り立つ、通常自分の所属する施設では不可能な体験でしたが、とても新鮮でした。

○これまで当館では、大・小2種類のハロゲンスポットだけで対応していたのが現状です。今回、光の性質や人間の目の特性など、基本を知ることができ、作品を正しく見せることの重要性と光の種類による相違を体感できたことがとても大きかったです。これまで比較対照するものがなかっただけに、今後、より光の専門的な視点で作品空間を創造していけそうに思います。

○①演色性について数値だけで判断するのではなく、照明の対象（各資料ごと・空間）によって使えるものが違うので、実際に使ってみての確認が必要だと感じました。
②企画展などの期間が限られているものには、汎用品（色フィルム、テープ）で代用できるものが意外にあり、すぐに使える技術（知識）だと感じました。

質問2
今後、自分たちの館で試してみたい照明技術は
何ですか？

○照明の選択肢がほぼない当施設ではあるが、フィルターを使用するなどして色温度を調整し、作品の（作者の）なるべく意図する表現に近づけるよう、照明の持つ光の特徴（色温度や演色性）を意識して、照明を行いたいと考えています。

○①ただ作品を照らすだけの照明ではなく、作家や私たちがどう見せたいのかという思いまで汲み取った光の当て方、つくり方を一点一点探っていきたい。その際、今回知った様々なライトやフィルターの使い方をぜひ試してみたい。ただし、現時点では対応品はありませんが…。
②早急にLED化計画を立ち上げていく必要性がある。今回の研修で学んだ知識や操作した器具等を積極的に活用できる導入計画をス繰り上げていきたい。

○年間累積照度ついて、考えさせられました。当館で考えた場合、自然史・歴史・美術工芸など各分野の資料が展示されているので、LED化の前に各コーナーの限界照度をはじき出し、展示資料の入れ替えや照明計画に活かしていきたいと考えています。

○資料一つ一つの声を聞いてみようと思う。カッティングライトは、とても興味深かった。さらにさまざまなフィルターを使いこなせるとよいと思った。

質問3
今後、他館の照明を見る時に、どんな点を気にかけて
見ますか？

○どんな照明をどう当てているか、それによって作品をどう表現しているか、また光による全体の空間作りに注目して見てみたいと思います。
○①どこから、いくつの光源で照明を当てているか。
②色温度はどうなっているか（全ての作品で統一されているのか、個々で違うか）
③作品のどこに光の焦点を置いているか。
④素材ごとに光源の種類を分けているか。また、陰影の加減はどうなっているか。
○①作品（色）の見えやすさ。
②空間全体に不自然なところはないか。
③立体作品はどのようにライティングしているか。
○照明の当て方で、担当学芸員のねらいや思いがどこにあるのか、何を伝えたいのか気になってくると思う。
○例えば風景画ならば、その風景の時間帯と照明の色温度を合わせているのか、また作品によってどのように照明やあて方を使い分けているのか、その館の工夫を見たいと思う。

ユネスコ講演会

2015ユネスコ勧告に基づく博物館創造活動モデル構築に向けた国際交流事業 ①

目　的

2015年11月20日、ユネスコの第38回総会で「ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」が採択された。同勧告は、現代における博物館の社会的役割等を示した国際的なスタンダードとなるものだ。ユネスコの博物館に関する勧告としては、1960年以来55年ぶりで、2019年に初めて我が国で開催されるICOM京都大会でも議論される。

＊資料：2015ユネスコ博物館勧告　検索

今回のワークショップでは、勧告策定の中心的役割を果たしたユネスコ文化セクター・ミュージアムプログラム主任の林菜央氏を招へいし、策定までの経緯について解説とともに、参加者との質疑応答からその学びを深める機会とする。

講　師

林 菜央（ユネスコ文化セクター・ミュージアムプログラム主任）
林氏は、上智大学、東京大学大学院、ソルボンヌ大学、パリ高等師範学校で古代ローマ史(帝政期属州における東方起源宗教の伝播)を、ロンドン大学アフリカ東方学院で持続的開発論を学ぶ。1998年より在フランス日本大使館の文化アタッシェとして勤務後、2002年以降ユネスコ文化局文化遺産部、世界遺産センター、カンボジア事務所を経て2007年よりミュージアム関連業務担当となり、2014年より主任となる。開発途上国での世界遺産及びミュージアム支援事業に多数関わる他、2015年にユネスコ総会で採択されたミュージアムに関する国際勧告の起草から最終的な採択までのプロセスを一貫して担当。現在は勧告の執行を奨励するため2016年に設立されたユネスコハイレベルミュージアムフォーラムのコミッショナーを務めるほか、加盟国に対する幅広い政策支援を行っている。

開催日時

平成29(2017)年9月17日（日）
15:00～18:00(14:30～受付開始)
＊同タイトルの研修会は、18日（月）は京都国立博物館でも実施した。
＊17日の福岡会場は台風18号九州上陸のため、会場、開始時間を変更して実施した。

開催場所

西鉄ホテル・クルーム博多（福岡県福岡市博多区博多駅前1-17-6）

主　催

ICOM京都大会組織委員会、ICOM日本委員会、公益財団法人日本博物館協会、京都国立博物館、九州産業大学、ふくおか博物館人材育成事業実行委員会（九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館）

共　催

日本ミュージアム・マネージメント学会、
全日本博物館学会、日本展示学会

後　援

全国大学博物館学講座協議会

内　容

【モデレーター】緒方 泉（九州産業大学美術館教授）
14:30分 受付　**15:00分** 開会、開催趣旨説明　**15:15** 自己紹介、グループワーク1「ユネスコ勧告を読んで気になること」　**15:30** 講義「ユネスコ勧告策定までの経緯と今回の勧告の注目点」
林 菜央（ユネスコ文化セクター・ミュージアムプログラム主任）　**16:15** コーヒーブレイク（参加者名刺交換）　**16:40** 演習「林さんに何でも質問してみよう」　**17:15** グループワーク2「ユネスコ勧告を踏まえ、今後の博物館像を考える」　**17:40** ふりかえり　**18:00** 閉会

受講者数

21名（福岡18名、広島1名、京都１名、東京1名）

事後アンケート

①ワークショップでは、国際間という大きな枠から、日本ひいては身近な地域の博物館が活動するには今回の勧告がどのような役割を果たすか、どのように読み解いて、活かすべきなのかなど、現場職員だけでは難しいことも、さまざまな立場の参加者の実地体験から意見を伺うことができた。ユネスコの1960年博物館勧告、2015年博物館勧告ではそれぞれの社会背景や国際情勢も異なることから、勧告の草案ができるまでの苦労を林先生から直接聞く機会を得られたことは大きかった。

2015年博物館勧告は、コミュニケーションに重きを置いているように感じた。参加者が現場職員だったこともあり、議論も自館の収蔵品を保存活用することに関心が寄せられていた。また、昨今の大臣発言や文化財の観光インバウンド効果を狙った活用についても通じるものがあったかと思う。現在ある収蔵品をどのように保存して活用するのか、博物館がどのように行政や市民に向けてコミュニケーションを図って行くのかを改めて考える時間になった。

②2015年博物館勧告は、今後の博物館のあり方の指針となりうるものであるが、世界的規模の考え方であるため、日本の博物館界の諸事情に合わせた取り入れ方を考えていかないとなかなか浸透しにくいという印象を持った。今後は、改訂される文化財保護法との整合性を図る必要がある。また、博物館が首長部局の管轄か、教育委員会管轄かでも2015博物館勧告の解釈が異なってくる可能性があるため、日本博物館協会がある程度の国内指針などを提示する必要も感じた。

③2015年博物館勧告を読み返す機会をいただきありがとうございました。改めて、ミュージアム、文化の持ちうる力、及ぼす力について、何を決断する必要があるのか、深く考える機会となりました。市民教育や文化の振興、多様性、対話、予防保存のための目録の大切さ、さらにはミュージアム外のコレクションの保護、市民の参画など、阪神淡路大震災等災害時や紛争等のなかで語られてきたこと（レスキュー・悉皆調査・ネットワークなど）、九州国立博物館のボランティアをさせていただいて以来学ばせていただいてきたこと（博物館の役割・資料の保存と活用・教育機関としてのミュージアム・市民参加など）、懸念（文化の政治利用・無理解など）、課題（対話・理解・地域文化の担い手と支援者、再構築・市民自身の学び）などが網羅されていることを知りました。

④この2015年博物館勧告を読み、そのあとでこの林さんの講演を聞き、めまぐるしく変わる世界において、博物館の今後をどうするべきなのかというところが自分にとっては印象に残った。特に、戦争や災害や資金難などで、博物館はおろか「館」としての機能も失われるような事案が起きたときに、そこにある文化財をどういう風に守るか、またどのように経営を再建するか、そのような状態に博物館が陥ったときにどのような支援計画が必要なのか…のところが印象深かった。そして、昔から国連やNGOはそうした博物館や遺跡の保護を行ってはいるのだが追いついていないという実情もわかった。基本的な博物館の機能を保つためには、その博物館のある国や自治体が責任を持ち、責任を持てないような博物館はつくらないことや財力のある団体に任せたほうがいいのかもしれないのかな…、と自分は思った。

また、文化財保護はもちろんだが、技術の進歩や保護制度の拡充により、1960年博物館勧告にはなかったような、メディアや仮想現実(ARやVR)の活用や学芸員と来場者のコミュニケーションを積極的にすすめるような項目があった。博物館が増え、多くの人々が携帯などの電子機器を持つ今の時代、メディアの活用において

ユネスコ講演会

SNSやブログ、博物館のホームページは特に宣伝において重要な手段となりうる。他の館との差を来場者に魅せるためにもSNSの活用は重要だと思う。博物館も時代にあった柔軟な思考や展示の方法が求められているのをしっかり認識できた。今後の博物館学習においても、何度かこの勧告を読み返して、自覚を持って学習していきたい。

⑤国際機関は、政治や経済事情には左右されず、純粋なプリンシプルが、学問的に打ち立てられて、それを各国が実行していくことが、求められている、それが、勧告の意味であると思っていました。つまり、最も先端の学問的成果が反映され、各国が、そのプリンシプルに合致するような博物館を目指して、国の法律や制度を変革して、博物館を整備していくことが、国の責務としてあるのだ、と思っていました。

ところが、林先生のご講演を伺うなかで、勧告の内容に、各国の事情や経済状況が、反映されている、しかも、声の大きな（或いは、経済的な拠出金の多い国の）意見が反映されてもいる、ということは驚きでした。これは「政治」の世界の駆け引きと同じではないか、と思いましたので、小さな国（経済的にも）の、貴重な真に有意義な意見が、排除されることのないように、と祈りました。

⑥林さんのお話を聞いて、ユネスコ勧告は、世界中の国々の意見がぎゅっと詰まったものだということを改めて感じました。その意見は、国によって重要視している事が様々で、今抱えている問題や、展示物を守り、この先伝えていく為の方法など、ただ勧告を読むだけじゃ知り得なかった事を知ることが出来ました。

私は、『2015年ユネスコ勧告』の項目の中で、「コミュニケーション」について気になっており、世界の博物館ではどのように人と博物館でコミュニケーションをとっているのか知りたいと思っていました。今回その事について知ることが出来ました。アフリカの例では、調査・研究したものを噛み砕いて伝えるだけでなく、実際に部族の方に来てもらって、話してもらう場を用意していました。「国の遺産はその国の人に紹介してもらう」という林先生の言葉になるほどと思いました。その方が、遺産についての魅力を教えてもらえたり、その国の歴史との結びつき、伝統であったりなど、詳しく分かりやすく深く学べると思ったからです。

「コミュニケーション」は様々なとり方があります。

「双方向」という言葉はこれから博物館学習を行なっていく上で重要になると、今回のお話でも授業の中でも強く感じています。

授業で自分なりに2015年博物館勧告を読み解いて、そして今回、林先生のお話を聞いて、質問をして、さらに読み解いていくという、とても貴重な経験をすることが出来ました。

これからまだまだ学んで、様々な博物館体験をし、より深めていきたいと思います。

⑦今回ワークショップに参加して、外国のミュージアム事情や、日本と外国のミュージアムの違いなど、普段日本にいるだけでは分からないお話が聞くことが出来て良かったと思います。

特に印象に残ったのは、複製と模写についてのお話です。私は大学で現在模写を専攻しており、この話題は私にとっては身近に感じました。私はこれまで模写についてのことは技術的な側面から見て考えることが多かったのですが、資料保存の観点からのお話を聞いて、無意識のうちに制作側の視点から考えていたことに気が付かされました。画力の向上や、描写力を磨くというような技術的な面だけではなく、模写をすることそのものの意味も考えていきたいと思いました。

もう一つ印象深かったのは、日本と国外のミュージアムに関する捉え方の違いです。私自身今回初めて2015年博物館勧告を知りましたし、勧告に限った話ではなく日本はまだまだミュージアムに関する認識が浸透してないように思えました。また、日本のミュージアムの定着度の低さだけでなく、国外では移民問題や紛争などで文化存続の危機が発生していることなど、国内外で様々な問題が今のミュージアムに存在していて、学芸員になるにはそのような問題も念頭に置きつつ考えていかなければならないのだと思いました。特に勧告を作る際のお話で、ブラジルやパレスチナ、パキスタンなどのいわゆる発展途上国や国内情勢が不安定だといわれる国々が勢力的に草案づくりに参加したことを聞いて驚きました。

国際調査

2015ユネスコ勧告に基づく博物館創造活動モデル構築に向けた国際交流事業 ②

国際調査の目的

現在、全国には5,700近い博物館が存在する。ICOM2019京都大会に当たり、ユネスコ勧告2015に掲げられる「ミュージアムは（中略）市民意識の形成また集団的アイデンティティを考える上で重要な役割を持つ公共空間である」そして「恵まれない立場のグループを含め、すべてに開かれた、あらゆる人々の身体的・文化的アクセスを保証する場であるべきである」という博物館の社会的な役割をテーマに、英国・米国の博物館学芸員との交流を通じてアジアに開かれた「ミュージアム都市福岡」における、グローバル化拠点としての新たな方策モデルの構築を目指す。

「英国調査」

英国調査の個別テーマ

「博物館と市民意識・集団的アイデンティティの関係を探る」

英国調査の日程

○2017年9月7日（木）日本出発、7日（木）ロンドン到着、カーディフへ移動、泊。
○2017年9月8日（金）カーディフ（泊）
1. セント・ファガンズ国立歴史博物館
2. カーディフ国立博物館
○2017年9月9日（土）カーディフからブレナヴォンへ移動、泊
3. テクニクエスト（科学館）
4. ブレナヴォン製鉄所
○2017年9月10日（日）ブレナヴォンからロンドンへ移動、泊
5. ビッグ・ピット国立石炭博物館
○2017年9月11日（月）ロンドン泊
6. ロンドン科学博物館
7. ロンドン自然史博物館
8. ヴィクトリア&アルバート博物館
9. オックスフォード大学附属アシュモレアン博物館
○2017年9月12日（火）ロンドンから日本へ、13日（水）帰国

英国調査のメンバー

松村 利規（福岡市博物館）
朝烏 和美（田川市石炭・歴史博物館）
五月女 賢司（吹田市博物館）
緒方 泉（九州産業大学美術館）

特徴的な博物館の紹介

セント・ファガンズ国立歴史博物館

ウェールズの首都・カーディフ郊外にあるセント・ファガンズ国立歴史博物館は、1948年の設立以来、ヨーロッ

セント・ファガンズ国立歴史博物館

セント・ファガンズ国立歴史博物館

国際調査

パを代表する野外博物館として知られる。16世紀の領主の居館とその広大な敷地に、ウェールズ各地から代表的な古建築が移築され、地図を片手に散策しながら同地域の歴史と伝統を体感していくことができるよう設計されている。

エントランス機能を持つメインビルディングには広いホールとレクチャールーム、そして多くのスタッフが配されており、学校その他の団体見学に力点を置く姿が印象的だった。

またウェールズの他の博物館と同様に、説明文はすべてウェールズ語と英語が併記されており、歴史や伝統の学びが独自の言語文化と結びつきながら、より深まっていく効果があるように見られた。現在の生活と乖離しがちな古民家だけでなく、工芸品の工房には職人がいたり、近代の商店建築のなかでショッピングも楽しめるなどの点も、近年の野外博物館の流れを先導した事例として参考になるものであった。

＊行き方：カーディフ中心部からバスで30分。

カーディフ国立博物館

カーディフ国立博物館の展示については、リニューアルが進んでおらず、際立った展示内容はさほど見当たらなかったが、1階が自然史展示、2階が美術展示と、一つの博物館の中に2つの要素を収めているという点で特徴的といえる。また、カーディフ国立博物館だけの特徴ではないが、ウェールズの公共施設全体のアクセシビリティ向上対策として、館内案内文等の2言語表記（英語、ウェールズ語）が挙げられる。アンダーソン氏が館長のため、ウェールズ社会が内包する難民の生活を切り取った当事者参加型の展示や、関係団体を招いて子どもの貧困に対して博物館が果たす役割について討議するシンポジウムを開催するなど、博物館の社会的役割を地元関係者と共に考え、社会に発信する企画が際立っている。

一方、英国の博物館では10数年前後前にInclusion Officer（社会的弱者の博物館利用促進のための専門職）という職種が重点的に配置されていたが、現在の英国の博物館や民間を含むその他の施設（銀行や病院など）では、そうした職種が現在全くなくなった訳ではないものの、Brexitの影響で、テロ対策のためのSecurity Officerが多く配置されるようになり、またテロ攻撃に遭う可能性がある一部の博物館では来館者に対するセキュリティーチェックが2016年夏頃から厳しくなったことが今回の調査で分かった。内包する社会的弱者を当該社会が取り込む政策から監視対象にする政策への緩やかな転換といえる。（五月女 賢司）

＊行き方：カーディフ・セントラル駅から徒歩15分。

カーディフ国立博物館

カーディフ国立博物館

ビッグ・ピット国立石炭博物館

ビッグ・ピット国立石炭博物館

ビッグ・ピット国立石炭博物館

ビッグ・ピット国立石炭博物館は、1980年に閉山した炭鉱跡地を利用し、1983年に開館した。坑道及び地上施設が保存され、坑内体験ツアーを行っているのが大きな特徴である。元炭坑マンの案内でヘルメットやキャップランプ等を装着し、竪坑ケージで坑内に降りる。安全性の問題をクリアしていれば、実際の坑内体験は貴重なものであり、図面などで解説するよりも分かりやすい。また、炭鉱マンのロッカーがそのまま残され、開くと扉内には持ち主の略歴が掲載、内部に荷物が展示され、炭鉱で働く人々の人物像が浮かびあがってくる。展示資料は、坑内作業、保安、生活、文化活動など総合的で、じん肺（健康被害）という炭鉱のマイナス面の展示もあり、産業を支えたというプラス面とともに歴史的事実を伝える非常に充実した内容である。坑内体験で好奇心を刺激し、その後、地上施設と展示資料の見学で理解が深まるという、魅力的な展示構成であったと感じた。（朝烏 和美）

＊行き方：カーディフ・セントラル駅からニューポート駅へ行き、中心部のバスセンターからX24番バスでブレナヴォンへ。そこからブレナヴォン製鉄所を経由し徒歩30分。

「米国調査」

■ 米国調査の個別テーマ

「あらゆる人々の身体的・文化的アクセスを保証する博物館のあり方を探る」

■ 米国調査の日程

○2017年11月6日（月）日本出発、6日（月）ニューヨーク到着
○2017年11月7日（火）ニューヨーク（泊）
1. チルドレンズ・ミュージアム・オブ・マンハッタン
2. ブルックリン・チルドレンズ・ミュージアム
○2017年11月8日（水）ニューヨーク（泊）
3. メトロポリタン美術館
○2017年11月9日（木）ニューヨーク（泊）
4. ブルックリン美術館
5. アメリカ自然史博物館
2017年11月10日（金）ニューヨーク（泊）
6. ステューディオ・ミュージアム・イン・ハーレム
7. ローアー・イーストサイド・テネメント博物館
○2017年11月11日（土）ニューヨークから日本へ、12日（日）帰国

■ 米国調査のメンバー

鬼本 佳代子（福岡市美術館）
藤田 千織（東京国立博物館）
染川 香澄（ハンズオンプランニング）
中込 潤（九州産業大学美術館）

■ 特徴的な博物館の紹介

ブルックリン美術館

ニューヨークはブルックリン地区に位置するこの美術館のルーツは、商人の子息を教育するために1923年に設立された図書館である。地域、時代、そしてジャンルをまたぐ広範なコレクションを所蔵しており、教育活動にも熱心な館でもある。ここでは、小学3年生向けのツアーを見学したので、その紹介をしたい。日本でいう学習指導要領によると、この年齢の子どもたちには自発的に学ぶ力を身につけることが望まれるとのこと。ツアーも、作品を巡るエデュケーターの「開かれた質問」と子どもたちの自発的な応答で構成されていた。興味深かったのは、ツアーのテーマが「I AM A (私は)」と、アイデンティティを問うものであり、選定された3つの作品もアメリカという国の成り立ちとその多面性を考えさせるものであったことである。日本でも対話型鑑賞という形で、子どもたちに自発的に学ぶことを促してはいる。

国際調査

しかし、美術を通して歴史と社会を見つめる、自分とは何かを考える、といったテーマが、果たして日本の美術館のツアーにあるだろうか。美術という枠組みを超えて社会の課題を投げかけるツアー内容に、教育に対する同館の強い信念を感じた。（鬼本佳代子）
＊行き方：マンハッタン中心部から地下鉄2番で30分。Eastern Parkway Brooklyn Museum 駅下車徒歩2分。

メトロポリタン美術館

メトロポリタン美術館（The Met）はセントラルパークの東側にあり、1870年開館の私立美術館。今回は同館のアクセシビリティについて調査した。The Metには自閉症、発達障害、学習障害の来館者向けのプログラムがあり、30年前から行われている。ディスカバリーズとよばれるこのプログラムは、月に一回実施され、5歳から17歳の子どもとその友達、家族を対象としたものと、18歳以上の人とその友達、家族を対象とした2種類が用意されている。年齢や、障害、関心の違いなどで、少人数のグループに分けて行われている。たとえば、展示スペースで作品と同じポーズをとったり、スケッチをしたりしたあと、教室で作品づくりなどをする。ここでは、作品制作の技術を得るだけでなく、社会への適応能力を養うことも期待されている。ディスカバリーズ以外にも、年齢や、関心に応じて数多くのプログラムが用意されており、ディスカバリーズを経て、他のプログラムにも積極的に参加するようになることもある。また、こうした障害を持った来館者が安心して過ごせるように、オンラインで事前に館内の様子がわかる工夫や、ブランケットやタイマーなど気持ちを落ち着かせるための道具の貸し出しなども行っている。日本ではまだあまり行っていないプログラムだが、博物館の役割を考えるうえでも参考にしたい事例である。
（中込 潤）
＊行き方：マンハッタン中心部から地下鉄4,5,6番で10分。86 St駅下車徒歩10分。

ローアー・イーストサイド・テネメント博物館

マンハッタンのローアー・イーストサイドエリアで1863年から1935年まで、テネメント（共同住宅）として使われたのち放置されていた建物を、住宅の内装をそのまま活かし1988年に開館した。その多くが移民である一般市民の暮らしを通しニューヨークの歴史を語る場として多くの来館者を集める。自由な展示見学はなく、すべてスタッフがアテンドする形で、平日でも1日に30本以上、週末は50本以上の多様なツアーが行われている。特徴的なのは、演劇型ツアー「住民にあう」（Meet the Residents）。代表的なものは「Victoria Confino」ツアー（60分、5歳以上対象）。舞台は1916年。来館者は、エデュケーターに連れられ14歳の少女、ヴィクトリアの家を訪ね、プロの俳優が演じるヴィクトリアに当時の暮らしや経験について聞く。演劇という没入感を与える形式により、来館者は、生きる時代が違っても、移民であっても、ここにいた住民は自分と何ら変わらない人間であることを実感する。館のコレクションや展示への理解を促すことに加え、他者への共感を醸成し、歴史・社会への参加意識、当事者意識を喚起するプログラムに、分断や差別といった社会問題に取り組む糸口があるのではないかと感じた。
（藤田 千織）
＊行き方：マンハッタン中心部から地下鉄F線で10分。Delanceyぎ下車徒歩5分。

ローアー・イーストサイド・テネメント博物館

10

ブルックリン美術館

ブルックリン美術館

メトロポリタン美術館

メトロポリタン美術館

テクノクエスト

ブレヴァノン製鉄所跡

ブレヴァノン世界遺産センター

オックスフォード大学附属アシュモレアン博物館

「英国調査」

「米国調査」

チルドレンズ・ミュージアム・オブ・マンハッタン

ブルックリン・チルドレンズ・ミュージアム

アメリカ自然史博物館（ディスカバリールーム）

ステューディオ・ミュージアム・イン・ハーレム

キッズ・ミュージアム・スクール

昨年度に引き続き、4回連続参加する児童(小学3年から6年、15名固定)の行動変容を調査するキッズ・ミュージアム・スクールを開催した。活動の内容、目的などは昨年度同様に行い「生活の中の造形や美術の働き」に興味・関心を持たせる活動へ展開可能かどうか(非日常と日常の連続性)についてアンケート調査を行なった。方法は各回終了後の参加者・参与観察者(サポート大学生)アンケート、家庭での行動変容アンケート(参加者・保護者のハガキによる報告)、各回の活動写真による動態変化調査や昨年度からの継続参加を実験群、初参加を統制群としたデータ分析・コラージュ分析などを行った。(担当者:緒方、西嶋、赤司 真里菜【本学大学院芸術研究科1年】)

第1回 「絵本に描かれた動物、剥製になった動物を観察する」

実施日:2017年10月21日(土) **実施場所**:九州大学総合研究博物館(福岡市)

内 容:剥製、骨格標本を観察して、体の仕組みを理解する。

タイムスケジュール

9:30 九州産業大学正門集合　9:30 九州産業大学正門集合　10:30 九州大学総合研究博物館到着・入学式・絵本の読み聞かせ[図1]　12:00 昼食　13:00 剥製標本見学[図2]　14:00 骨格標本見学[図3]
15:05 ふりかえり・記念撮影[図4]　15:40 九州大学総合研究博物館出発　16:20 九州産業大学正門到着
16:30 解散

内容と次回への課題

児童とサポート大学生合わせて30名余が5班に分かれ、貸切バスで会場まで移動した。まず九州大学の旧工学部の講義室でスクール入学式を行った。その後、各班に分かれ、「動物」がテーマの絵本の読み聞かせをした。絵本の中にどのような動物が出てきたのか、どんなストーリーだったのかをふりかえった。その後、絵本という二次元の世界から実際の動物剥製標本や骨格標本を見たり、触ったりして、絵本の中の動物と本物の動物との違いを調べた。初回活動で児童とサポート大学生は共に緊張していたが、時間が立つにつれて緊張もほぐれ、班活動は親密になっていった。今回は「観察力・触察力」「読解力」をテーマにしたが、次回は、児童達同士のコミュニケーション力向上を目標としたい。

図1　絵本の読み聞かせ

図2　動物剥製標本見学

図3　骨格標本見学

図4　記念撮影

11-1

第2回 「動物の行動・表情を観察する」

実施日:2017年12月2日(土) **実施場所**:到津の森公園(北九州市)

内 容:前回の体の仕組みの理解のもと、生きている動物の行動や表情、臭いなどを観察する。

タイムスケジュール

9:30 九州産業大学正門集合　11:00 到津の森公園到着　11:20 到津の森公園見学[図5][図6]
12:20 昼食(自由行動)　14:00 飼育員さんにきいてみよう[図7]　15:00 活動終了・記念撮影[図8]
15:10 到津の森公園出発　16:25 九州産業大学正門到着　16:30 解散

内容と次回への課題

前回同様、貸切バスを使い到津の森公園へ向かった。第1回目のふりかえりや事前打ち合わせから、第2回目では班編成を変更した。それに伴いバスの中で自己紹介と前回の感想を一言ずつマイクで話した。到着後、各班は園内をまわり、「親子を見つける」と「シマウマの柄を描いてくる」をミッションとして、本物の動物を観察した。剥製と違い、動物の動きや臭い、鳴き声からそれぞれの存在感を味わった。昼食後、飼育員に解説を受けながら動物園をまわった。児童達は、気づいたことや観察しただけではわからないところを飼育員に質問した。班編成を性別で分けたため、第1回よりもスムーズな「コミュニケーション」をとることができていた。また、動物園では飼育員の話を聞き、動物の生態について質問することから「観察力」「読解力」の向上が顕著に見られた。

11-2

図5　到津の森公園見学

図6　到津の森公園見学

図7　飼育員さんにきいてみよう

図8　記念撮影

キッズ・ミュージアム・スクール

第3回 「動物の絵画・彫刻を観察する」

実施日：2017年12月23日（土） **実施場所**：福岡県立美術館（福岡市）

内 容：展覧会「美術館は動物園！」を見学。実際の動物と美術作品を比較して、作者がどこに関心を寄せながら制作に取り組んだかを理解する。

タイムスケジュール

9:30 九州産業大学正門集合 **10:15** 福岡県立美術館到着・展覧会見学［図9］
11:30 学芸員さんにきいてみよう［図10］ **12:00** 昼食 **13:00** 作品鑑賞・お話をつくってみよう
14:40 発表・ふりかえり・記念撮影［図11］［図12］ **15:40** 福岡県立美術館出発 **16:20** 九州産業大学正門到着
16:30 解散

内容と次回への課題

今回も貸切バスで福岡県立美術館へ向かった。到着後、美術館マナーを確認してから、展覧会「美術館は動物園！」の展示室を見学したあと、作品からお話を作り発表した。はじめに、担当学芸員のギャラリートークを聞き、作品の特徴などを知った。昼食後、作品の「描き方」や「素材」などの特徴から、描かれている動物の気持ちを考えた。それを活かして作品からお話を作って発表した。作品の動物のすべてを克明に描くのではなく、特徴を活かして制作していることへの気づきを語る児童が多かった。

班内で一緒に作品を鑑賞し、お話づくりをして発表の練習をしたため、班内の信頼関係が豊かになっているのが伺えた。作品鑑賞では作品の中の動物の気持ち、どんな場所、何をしている、など気づいたことをメモし、作品発表に活かす児童もいた。

11-3

図9 展覧会見学

図10 学芸員さんに聞いてみよう

図11 完成したお話の発表会

図12 記念撮影

キッズ・ミュージアム・スクール

第4回 「動物を観察して伝えたいことを表現する」

実施日：2018年1月20日（土） **実施場所**：九州産業大学 グローバルプラザ（福岡市）

内 容：これまでの体験をふりかえり、自分が仲間たちに伝えたいことを写真コラージュ作品で制作して表現する。

タイムスケジュール

9:30 九州産業大学正門集合 **9:45** グローバルプラザ到着 **9:50** 活動開始 **10:10** これまでの体験のふりかえり［図13］ **12:00** 昼食 **13:00** 写真コラージュの制作［図14］ **14:10** 作品発表会［図15］
14:30 修了式準備 **15:00** 修了式 **15:50** 修了式終了・記念撮影［図16］ **16:30** 解散

内容と次回への課題

最終回となる今回は、冒頭でこれまでの活動を各班でふりかえり、各回の活動場所、どんな人に会ってどんな話を聞いたか、そこで体験したことの豆知識をまとめた。その後、活動で撮影した写真群（約1200枚）から気になった写真を選び、3回の活動を写真コラージュとしてまとめた。最後は、サポート大学生、保護者を前に制作した写真コラージュを持って、児童がこれまでを語る発表会を行った。写真コラージュ制作では、選んだ写真から気になる部分を切り取り、色紙に貼るという行為を無心にする児童の姿が印象的だった。保護者は児童の発表を聞くことで、今回のスクールで何が起こり、何に感動したのかを知る機会になった。4回のスクール最後の記念写真は児童とサポート大学生が1回目と異なり、緊張感が解けた達成感に満ちた表情をしていた。

11-4

図13 これまでの体験活動のふりかえり

図14 写真コラージュの制作

図15 作品発表会

図16 修了式終了・記念撮影

キッズ・ミュージアム・スクールまとめ①

量的・質的アンケートを行い子どもたちの行動変容を知る

今回の活動では計7種類のアンケートなどから、量的・質的に子どもたちの行動変容を検証した。量的には①児童対象のアンブレラシートによる活動終了後のアンケート②サポート大学生対象の参与観察シート③保護者対象の活動終了後のハガキアンケート、質的には①参加児童の「ワークシート」②サポート大学生の各回活動終了後のふりかえりインタビュー③リサーチパートナーとなった保護者の「驚き・発ノート」という日記帳④写真コラージュ作品などがあった。

まず、活動終了後に行ったアンブレラシートとハガキアンケート結果を紹介する。

1.アンブレラシートの集計

各活動の終了後に短時間で記入でき、負担をかけないアンケートでありつつ、量的にデータが集めやすい方法を考慮して、ロンドン大学博物館で開発されたアンブレラシート（ウェルビーイング対策ツール）を使用した（図17）。質問は、①「面白かった」②「もっとやりたかった」③「チャレンジできた」④「刺激を受けた」⑤「熱中できた」⑥「話しやすかった」の6項目で5段階評価法とした。アンケートは4回のプログラムで使い回しができるようにラミネート加工をし、水性ペンで裏に名前を記入し、5段階評価の数字（5高い→1低い）に○を付けるようにした。各回のアンケート結果はスキャナーで取り込み、その数値をエクセルに入力し集計後、各回で全項目の 平均値をグラフ化にした（図18）。

○全ての平均値を出すと、各回平均が4.3（86%）となり、ワークショップの内容が充実していたことが分かる。

○ところが各回の男女で数値の変化があり、第1回男子（4.3）女子（4.6）、第2回男子（4.6）女子（3.9）、第3回男子（4.6）女子（3.7）、第4回男子（4.7）女子（4.2）となり、第1回では女子が高く、第2回～第4回は男子が高くなる。

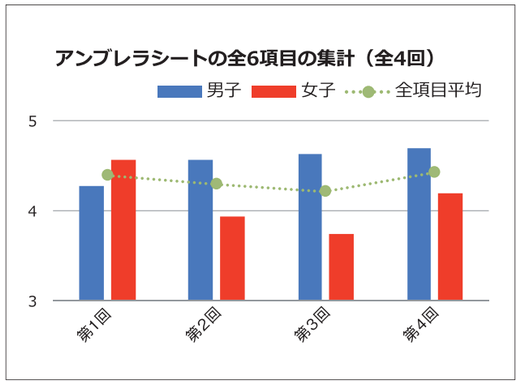


図18　アンブレラシートの全6項目の集計（全4回）

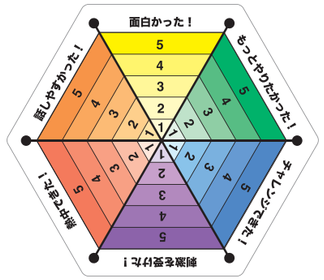


図17　アンブレラシート

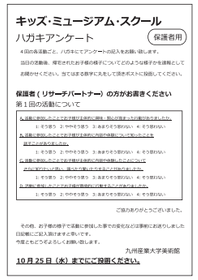

キッズ・ミュージアム・スクール
ハガキアンケート
保護者用
4回の各活動ごと、ハガキにてアンケートの記入をお願い致します。
当日の活動後、帰宅されたお子様の様子についてどのような様子かを選択肢として点線させください。当てはまる数字に丸をして頂き点メスに投函してください。
保護者（リサーチパートナー）の方がお書きください
第1日目の活動について
A. 活動に参加したことで自子様は何に興味・関心が高まったと思いますか。
1. そう思う　2. ややそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない
B. 活動に参加したことで自子様は何についての知識や体験について知ったことを話すことがあったと思いますか。
1. そう思う　2. ややそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない
C. 活動に参加したことで自子様は何についての知識や体験についてさらに知ったことを話すことがあったと思いますか。
1. そう思う　2. ややそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない
D. 活動に参加したことで自子様は何について新たにチャレンジしたと思いますか。
1. そう思う　2. ややそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない
ご協力ありがとうございました。
その他、お子様の様子で活動に参加した事での変化などは事柄におぼえがありましたら日記帳にご記入頂けますと幸いです。
今度ともどうぞよろしくお願い致します。
九州産業大学美術館
10月25日（水）までにご投函ください。

図19　ハガキアンケート

2.ハガキアンケートの集計

これは各回終了後に子ども達に渡し、保護者が記入して投函するアンケートである。「A:主体的に興味・関心が高まった。B:主体的に内容や体験について知った事を話す事があった。C:さらに知りたいと思い行動した。D:意欲的に行動するようになった」という項目について、「4:そう思う～1:そう思わない」の4段階でチェックする（図19）。

こちらも各回で全項目の平均値をグラフ化（図20）すると、

○全項目の平均は3.2（79%）で、おおむね家庭での行動変容がみられたことが分かる。

○ところが、各回の男女で数値の変化があり、第1回男子（2.8）女子（3.2）、第2回男子（2.9）女子（3.4）、第3回男子（3.3）女子（3.1）、第4回男子（3.5）女子（3.4）となり、第1回～第2回では女子が高く、第3回～第4回は男子が高いという傾向になった。

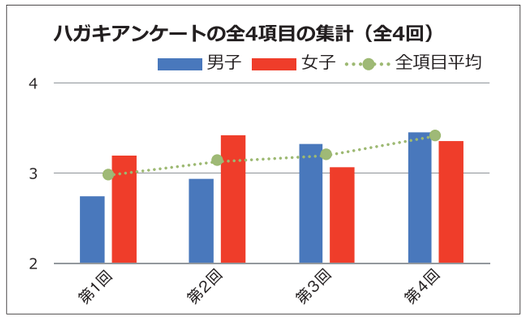


図20　ハガキアンケートの全4項目の集計（全4回）

これまで見てきたアンブレラシートとハガキアンケートから、第1回では女子の数値が高く、第2回の活動では男女がアンブレラシートとハガキアンケートのグラフが逆転し、第3回以降は男子の数値が高くなっていることが分かる。また男子は第2回の活動では活動当日は数値が高いが、家庭での行動変容があまりみられなかった。そして女子は当日での活動より家庭での行動変容があったことが分かる。

12-1

キッズ・ミュージアム・スクールまとめ②

継続参加した子どもの行動変容を知る

第3回「動物の絵画・彫刻を観察する」での活動「お話をつくってみよう」では、美術作品を観察し、作者がどこに関心を寄せながら制作に取り組んだかを理解するねらいがあった。特に、継続した子どもたちの中には①物語の文字数が増える②内容が豊かになる子どもがいた。以下、A子（図21）とB子（図24）の事例を基に、それぞれの物語を起承転結に分け、文字数を加えた上でその内容を比較したい。

A子の場合、文字数で見ると28年度が28文字に対し、29年度が209文字と８倍に増えている。次に、物語の内容は、28年度が見たままを文字に置き換え、「結」まで至らず完成していない。29年度は、「ある日」から始まり、動物たちの関係性を想像し、物語を完成させている。またB子の場合、文字数で見ると、28年度が105文字、29年度が209文字と2倍に増えている。物語の内容は、28年度が「私は～と思う」という書き方で作品に描かれる動物の動きから「水をのむ」ことを想像している。それに対し、29年度は、描かれている女性の生い立ちやその背景にまで想像が膨らんでいる。そのため、物語世界に没入し、女性の心情などを詳しく書くことができている。

このような結果から、継続参加する意味が浮かび上がってくる。それは、①よく観察するとそこで展開する物語(作者の思い)に通じやすくなる②仲間たちと思ったままに想像し合い、伝え合う楽しさを味わいやすくなる③想像が豊かになることから、それを表現する語彙が増えてくる④昨年参加した子どもや大学生に会えたことで、安心した空間を意識しやすくなることである。「観察力・触察力を高める」「読解力・語彙力を高める」「表現力を高める」「コミュニケーション力を高める」というスクールの目標が達成されたことが分かる事例となった。

図21　A子H28年度 物語発表『円山応挙「竹鶴若松図屏風」』／H29年度 物語発表『宮脇竹次「竜虎図」』

	H28年度	28字	209字	H29年度
起	右にいたつるはたべるものを	13	51	ある日つみのないどうぶつがいた。ともだちをまっているところに後ろからとらがきてどうぶつをかこうとした。
承	さがしていたけど	8	48	それを見つけたりゅうがすかさずとめにきた。そしてどうぶつをかけたたたかいがはじまった。
転	だけでたまたまあったメスと	13	88	りゅうはとらのこうげきをよけすかさずこうげきをした。そのこうげきはみごとにあたり、とらがふらつく。 それをみたりゅうはどんどんこうげきをしてついにかってそのどうぶつはたすかった。
結			44	そこに友達がきて、とらも心を入れかえて、それからどうぶつとやさしくせっするようになった。

（注約）赤文字は、H28年度の言葉づかいと比較をし、明らかに違う言葉（オノマトペ・文法）を強調させた部分を表している。

図22　A子小学３年 班で物語を模索中

図23　A子小学４年 展示室内での発表

図24　B子H28年度 物語発表『東山魁夷「山湖」』／H29年度 物語発表『古沢岩美「大荊街」』

	H28年度	105字	263字	H29年度
起	森の中にくまみたいのがいた。	14	55	ある街の女の人が食料ちょうたつに街から出ました。 食料をさがしているといつのまにか調らしらない町に来ていました。
承	わたしはさんこという絵を見ていたら木とさくのあいだから	27	50	その町には食料も人かげも何にもなくただ人のほねと思われるものがそこらじゅうにひろころがっていました。
転	くまがのぞいているように見えました。でもよくみえなくて	27	86	女の子人が町をあたりを見ていると、キャーというさけびごえがきこえました。 うしろになにかかげがみえたのでふりむいてみるとそこには血がついたはいえながうなり声をあげていました。
結	わたしはその絵を見てくまが湖に水をのみに来た 絵じゃないかな～と思いました。	37	61	女の人はにげたけどうしろからおいつかれて首をかみちぎられほかの町のじゅうにんと 同じようにほねになってと化しました。おしまい

（注約）赤文字は、H28年度の言葉づかいと比較をし、明らかに違う言葉（オノマトペ・文法）を強調させた部分を表している。

図25　B子小学３年 班で物語を模索中

図26　B子小学４年 展示室内での発表

12-2

キッズ・ミュージアム・スクールまとめ ③

写真コラージュ作品を空間配置の観点から子どもの行動変容を知る

◎ A子の写真コラージュを見たサポート大学院生の感想

班活動に参加したサポート大学院生C子（芸術研究科博士前期課程1年、女子）がA子の写真コラージュ（図27・28）を見た時の感想は、以下のとおりである。

「28年度のコラージュは大小様々で、第1回、第2回、第3回の写真の配置には統一感があまり見られません。また、真ん中に大きく「自分③」を配置し、その周りにある自分の目線は、色紙のあちらこちらに向いています。この活動で初めて出会う人達と仲間になることや初めて行く場所に興味・関心が向いているように感じます。その場の面白い！すごい！を直球に表しているかのような、動物の角の写真の切片やピースした手の写真のみを貼り付ける表現方法が、一瞬の出来事を映像のようにちらつかせているような印象です。それに対し、29年度のコラージュの右下に、自分と共に一緒に見た仲間や学生の姿があります。その目線の先には、ライオンのオスとメスが配置され、それらを一緒に観ているようにも感じます。またそれぞれの距離感が近く、対等な関係で同じ目線で見てきたことを強調しているかのようです。

そして、1番上の左端には、第３回目（福岡県立美術館）の集合写真を大きく切りとって貼り付けています。まるで、仲間の存在を大事に思っているかのように、A子は仲間に腕を回しています。また、動物の写真はライオンが多く使用されています。百獣の王やリーダーのような存在（強さ・やさしさ・組織の関係性を大切にする）を意識しているように思えます。」

◎ 空間配置に見るA子の写真コラージュ

サポート大学院生のC子の感想を踏まえ、その後A子のコラージュの切片（図27・28）と原写真を比較する作業を行い、改めて写真コラージュ作品を空間配置の観点から見ると、さらにいくつか気づきがあった。

【全体性】

H28：両手を後ろにして、こちらを見る「自分③」を1番大きく配置している。その回りを囲うかのような「自分①②④⑤」は小さく目線は散らばっていることから集中力を欠いているようにも思える。このことは、28年度の物語が未完で終わっていたことと関連があるように感じる。しかし、どっしりとした構えの「自分③」は、中央に配置していることから「色んな場所に自分は居て、色んな人やモノに出会った」という感情を膨らませた現れのように見える。また、右下に後ろを振り返る「自分①」の姿があり、まるで全体を見上げているようにも見える。それは、これからの大人の世界を期待すると共に、不安をも感じさせる情景である。

H29：中心部分には、「仲間⑤」と「仲間（先生）④」の姿がある。その横には、小さく「自分③」が寄り添っている。また、ライオンや別の班の小学生の男子と男子大学生と一緒に観察する写真を使用していることから、男性性への関心の高まりが現れているように見える。

【本能・直観】

H29：仲間と一緒に見て、学んでという対等な関係・組織的なシンボルとして、ライオンを用いて表現しているように見える。特に、左下のライオン①（図27）には、斜め上にある社会・感覚へと視線を示している。このことから、28年度とは違い、落ち着きや余裕が増えたことで、自分だけではない、仲間への意識を注いでいるように見える。

【倫理・宗教・父性・思考】

H28：左端には、「自分⑤」が「仲間(先生)⑫」へ身体を向け見つめている。自分が知らないことを教えてくれる「仲間（先生）⑫」は何を観ているのか、探っているように見える。

H29：左上に第3回の福岡県立美術館での集合写真がある。その中の「自分④」は、緊張感がなくにこやかに仲間に肩を回しており、より一層仲間との縁を繋ぐような意思の現れだと感じる。

【母性・家庭・感情】

H28：右下には後ろを振り返る「自分①」がいる。その視線には一緒の班の「仲間①②③④」の姿がある。もともと「仲間④」は「仲間③」の左手にはみ出していたが、A子はわざわざ「仲間④」だけを切りとり、「仲間③」の後方に配置し、班の一体感をより強固にしているように感じる。

H29：右下には、第２回の到津の森公園の「仲間①」を貼り付けている。２回目の使用写真を見ると、「自分⑤」と「仲間①」が柵越しに、動物を一緒に観ている写真を切り抜き、一人ずつ切り分け構成している。その事から、「仲間①」への関心の表れのように見える。移動中のバスの中では、隣同士で自らA子と「仲間①」＝B子(両者共28年度からの継続参加)は座り、楽しくおしゃべりをしていた様子から、仲間としての安心感・楽しさといった感情を共有する後ろ姿を連想しているように見える。

【社会・感覚】

H28：右上に配置されているのは剥製のペンギンとサルであった。生身の人や動物との関わりが希薄で、社会性の未成熟さを感じる。

H29：右上には、後ろ姿の自分を配置する。左側と下には、大きな「ライオン③④」がA子を守り、支えるように配置される。このことから、自分は様々な仲間に支えられながら、前に向いていこうという意思が感じられる。さらに、これからどうしようかなと顔を見せずに、思いを膨らませているようにも感じる。

開催場所
1回目：九州大学総合研究博物館　2回目到津の森公園・福岡市動物園
3回目：福岡県立美術館・福岡市立美術館　4回目：九州産業大学（コラージュ）

背景色：白地に黒い線
背景色：灰色に黒い線
背景色：黒

（左）空間図式にあてはめたA子のコラージュ　（右）A子が使用した写真切片

図27　H28年度A子のコラージュ

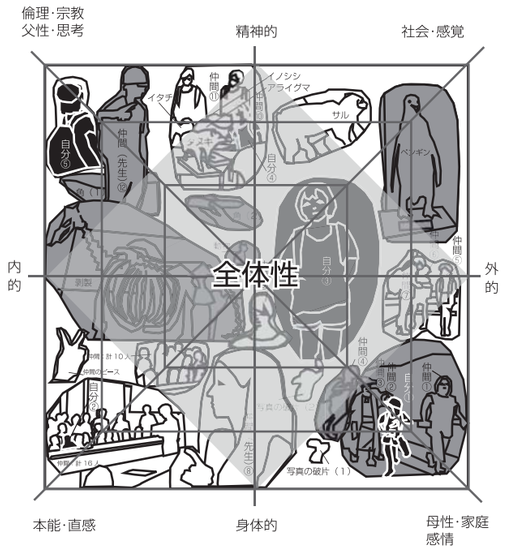
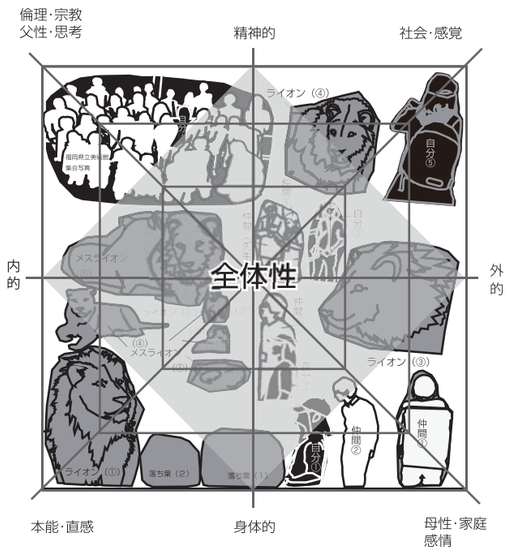


図28　H29年度A子のコラージュ



12-3